

サウンド・オブ・ウェザー

SOUNDS OF WEATHER

クリストフ・シャルルとフィリップ・サマーティスによるプロジェクト
A Project by Christophe Charles and Philip Samartzis

プロジェクト企画：
クリストフ・シャルル、
フィリップ・サマーティス

編集：
クリストフ・シャルル、
フィリップ・サマーティス、
クリステン・シャープ

装幀 編集デザイン：
遠藤律子、筒井聡志

翻訳：
クリストフ・シャルル、遠藤律子、菅靖子、
寺本**、小牧栞奈、武本拓也、八尋南実、
清水裕美、小高沙里

写真：
サイモン・ペリー、クリステン・シャープ、
宇治田枝理、鶴飼佑子、加藤道子（P.54～59）

協賛：
武蔵野美術大学
RMIT 財団

協力：
RMIT 芸術学部
RMIT プロジェクト・スペース／スペアールーム
ボゴンセンターフォアサウンドカルチャー
Artist Residency Tokyo (A.R.T.)／ジョニワカ
金王八幡宮（東京）

以下のウェブサイトに、映像・音響などの
資料が収録されている：
http://bogongsound.com.au/

印刷所：
望月印刷株式会社

発行：
2014 年 5 月

Book Edition:
Christophe Charles, Philip Samartzis and
Kristen Sharp

Book Editorial / Book Design:
Endo Ritsuko and Tsutsui Satōshi

Translation:
Christophe Charles, Endō Ritsuko,
Suga Yasuko, Teramoto Miki,
Kanna Komaki, Takemoto Takuya,
Yahiro Minami, Shimizu Yumi, Kodaka Sari

Photography:
Simon Perry, Kristen Sharp, Ujita Eri,
Tsurukai Yûko,
Katô Michiko (p.54 – 59)

Supported by:
Musashino Art University,
RMIT Foundation,
RMIT School of Art,
RMIT Project Space/Spare Room.
Bogong Center for Sound Culture,
Artist Residency Tokyo (A.R.T.) / Joni Waka
Konnô Hachimangû Shrine, Tokyo

More material (images, sounds) is
accessible from the related website:
http://bogongsound.com.au/

Printed by:
Mochizuki Printing, Tokyo

Publication Date:
May 2014



サウンド・オブ・ウェザー 総観図 04
個人と折り合いを付ける 06
天気の経験—明るさ、温度、降水、風 10

フィールドワークのドキュメンテーション

- Project 1 隅田川、東京 18
- Project 2 地下貯水蔵、埼玉 24
- Project 3 東京湾 27
- Project 4 ボゴング山アルパイン村 32
- Project 4-1 ボゴンビレッジ・レイクガイ 35
- Project 4-2 マッケイ山と
アルパイン・ハイプレーンズ 37
- Project 4-3 クローバー・ダム 40
- Project 4-4 ロッキー渓谷ダム 41

アートワークのドキュメンテーション

- Artwork 1 スーパーデラックス 44
- Artwork 2 ウェストスペース 48
- Artwork 3 プロジェクトスペース 50
- Artwork 4 金王八幡宮 53

アーティストステートメント&
バイオグラフィー

- アーティストステートメント 61
- アーティストバイオグラフィー 73

Sounds of Weather Synoptic Chart 04
To Come to Terms with Oneself 06
Experiences of Weather: Luminosity,
Temperature, Precipitation and Wind 10

Documentation of Fieldworks

- Project 1 Sumida River, Tokyo 18
- Project 2 Underground Water Storage,
Saitama 24
- Project 3 Tokyo Bay 27
- Project 4 Bogong Alpine Village 32
- Project 4-1 Bogong Village Lake Guy 35
- Project 4-2 Mt McKay and
Alpine High Plains 37
- Project 4-3 Clover Dam 40
- Project 4-4 Rocky Valley Dam 41

Documentation of Artworks

- Artwork 1 SuperDeluxe 44
- Artwork 2 West Space 48
- Artwork 3 Project Space 50
- Artwork 4 Konnô Hachimangû Shrine 53

Artists Statements &
Biographies

- Artists Statements 61
- Artists Biography 73

フィリップ・サマーティス
RMIT 芸術学部准教授

サウンド・オブ・ウェザーは、音やビデオ、パフォーマンスを通して天気の体験や行動を調査している武蔵野美術大学と RMIT 大学芸術学部の生徒と研究者から成る、異文化芸術および調査プロジェクトである。このプロジェクトは隅田川、東京湾、埼玉首都圏外郭放水路、オーストラリア高山地帯のキエワ水力発電計画の現地視察を含んだ。展示やパフォーマンスは SuperDeluxe、West Space Gallery、RMIT Project Space/Spare Room、金王八幡宮といった東京やメルボルンの様々な会場で行われた。Haco、JOU、佐藤実、角田俊也、工藤丈輝ら素晴らしいサウンドまたはパフォーマンス・アーティストたちは、プロジェクトに更なる貢献をしてくれた。

天気は、私たちの知覚や、住む場所を形づくる世界的な現象である。冬の不透明さ、春の聡明さ、夏の湿潤性、秋の爽快さは、私たちの感情を消えないように形づくる。天気と私たちの身体的な相互作用は平等に複雑である。私たちは特定の状態に合わせて装い、住処の温度を調節し、天気予報に執着する。天気はあまりにも公共的で頻

繁かつ徐々に変化するため、異常気象に注意をかきたてられない限り、それが当然のことのようにとられることがある。天気予報が何を示すかに関わらず、私たちが自然と人工の世界で体験する状態に対して、天気は永遠に強い影響力を発揮するだろう。

このカタログに掲載される作品は、メルボルンや東京の都市エリアからオーストラリア高山の荒涼とした土地にまで及ぶ様々な場所の組み合わせの中で、作者がどのように天気の影響を切り取ろうかと試た広範に及ぶ調査を提供してくれる。このプロジェクトの意図は、天気が日常生活をどのように形づくるかを自覚するために、それが利用されている空間や状態、技術、言語を調査することである。サウンド・オブ・ウェザーに寄与したアーティストたちは、今まさに住んでいる場所に影響する気象事象と同じくらい様々で力強い、相違な反応の組み合わせを提供してくれた。



Philip Samartzis
Associate Professor, RMIT School of Art

The Sounds of Weather is a cross-cultural art and research project comprising students and researchers from Musashino Art University in Tokyo and the School of Art at RMIT investigating the experience and behaviour of weather through sound, video and performance. The project has included site visits to the Sumida River, Tokyo Bay, Saitama Underground Discharge Facility and the Kiewa Hydroelectric Scheme in the Australian Alpine Region. Exhibitions and performances have occurred at various venues in Tokyo and Melbourne including SuperDeluxe, West Space Gallery, RMIT Project Space/Spare Room and Konnô Hachimangû Shrine. Notable sound and performance artists including Haco, JOU, Satô Minoru, Toshiya Tsunoda and Kudô Taketeru made additional contributions to the project.

Weather is a universal phenomenon that shapes our perception of ourselves, and the places that we inhabit. The opaqueness of winter, the luminosity of spring, the humidity of summer, and the briskness of autumn indelibly shape our emotions. Our physical interaction with the weather is equally complex. We dress for particular

conditions, we control the temperature of the spaces that we inhabit, and we obsess over weather forecasts. Weather is so common and change so often gradual that it can sometimes be taken for granted unless an unusual weather event occurs to excite our attention. Regardless of what the weather forecast may hold, it will forever exert a powerful influence on the conditions that we experience within the natural and constructed world.

The works presented in this catalogue provide a broad survey of how artists have attempted to capture the influence of weather within a diverse set of locations that span the metropolitan areas of Melbourne and Tokyo, and the rugged terrain of the Australian Alps. The intention of the project is to investigate the spaces, conditions, technologies, and language used to harness weather in order to activate awareness of how it shapes daily life. The artists who have contributed towards The Sounds of Weather have provided a divergent set of responses as variable and dynamic as any meteorological event influencing the site in which you inhabit at this very moment.



「音楽は永遠だが、聞くだけならばそれは断続的である」(1) これはヘンリー・デイヴィッド・ソローのことばであり、マルセル・デュシャンの作品と同様に、私たちが事象に対して関心を払えば、すべてのことをアートとして捉えることができるということを示している。私たちが音に対して注意を向ければ、それは音楽となる。私たちが音、つまり音楽を聞くという行為に着目すれば、それは自身の呼吸、聞き手の呼吸、外界からの音といった、周囲の環境に耳を傾けているということである。私たちが何に耳を傾けるかということは、何を見て何を感じるか、何を味わうかに関係している。すなわち全体として環境を認識する力とは、私たちの知覚の能力(暖かいや寒い、眠気や興奮、夢や想像)の結集である。これはいかなるときも複雑な経験である。たとえ音楽が終わっても、それは私たちの記憶の中に留まり、私たちが世界に対して何を感じ、何を考えるかといったことに常に影響を与える。

1975 年、ソローの賞賛者であるジョン・ケージは 1976 年のアメリカ合衆国建国 200 周年にあたり「レクチャー・オン・ザ・ウェザー」を作曲した。1979 年の「ロアラトリオ」と同じく、これは風、雨、雷といった周囲の音の記録を活用した希少な作品のひとつである。マージョリィ・パーロフはこれに対し以下のようなコメントを残している。「レクチャー・オン・ザ・ウェザー」は構造的で、制限に基づいた、(ジョイスが言うところの)「パービボコビジュアル」なパフォーマンスであり、これは「現実の」世界で私たちが知るところの「天気」をまねた、本質的には模倣のテキストである。これは少なくともパフォーマンスの間だけでも、天気や私たちが生きる環境を演じようとする。そうしてケージの「レクチャー・オン・ザ・ウェザー」はそれ自体を自然世界への入り口と提示している。」(2) この独特な作品は同時に、アメリカの政府機関に対するケージの批評的な見解を表している。「大志のみならず、知性(バックミンスター・フラワーの作品にあるように)や思慮分別(ソローの思想にあるように)こそが、アメリカのリーダーシップに欠けているものである。アメリカの政治構造はもはや私たちの生活環境と調和していない。」(3) 作品の中でケージは「国に関係なく、ソローが長年行ってきたように、個々人としてまた社会の一員として自分自身を、そして自身が生きる世界を見つめ直す機会を与えること」(4)を目指していた。

“Music is perpetual, and only hearing is intermittent” (1). This statement by Henry David Thoreau, like the ready-mades of Marcel Duchamp, shows that we can consider anything as art if we pay attention to it. When we pay attention to sound, it becomes music. When we focus on sound and therefore experience listening to music, we also hear the environment: our own breathing, the other listeners' breathing and the sounds from outside. What we hear is related to what we see or feel or taste; our perception of the environment as a whole is a combination of sensations we feel: warm or cold, sleepy or excited, we dream and we imagine. It is always a complex experience. Even when the music is over, we remember it, and it still influences what we feel and how we think about the world.

In 1975, John Cage, admirer of Thoreau, had written “Lecture on the Weather” on the occasion of the bicentennial of the U.S.A. (1976). Like “Roaratorio” (1979), it is one of the rare compositions where Cage uses recordings of environmental sounds: wind, rain, and thunder. Marjorie Perloff comments: « Lecture on the Weather is (...) a systematic, constraint-based “verbivocovisual” (Joyce's term) performance (...), essentially a mimetic text, one that simulates “weather,” as we know it in the “real” world. It wants, at least for the time span of its performance, to enact weather, the atmosphere in which we live. As such, Cage's Lecture on the Weather presents itself as an opening to the natural world » (2). That particular work also expresses Cage's critical ideas about the institutions of American government: « not only aspiration but intelligence (as in the work of Buckminster Fuller) and conscience (as in the thought of Thoreau) are missing in our leadership (...) Our political structures no longer fit the circumstances of our lives » (3). In this work, Cage wanted to « give another opportunity for us, whether of one nation or another, to examine again, as Thoreau continually did, ourselves, both as individuals and as members of society, and the world in which we live » (4).

The above ideas summarize what was on my mind when Philip Samartzis and I decided to start in 2011 the collaborative project “Sounds of Weather” between our univer-

上記の見解は、私がフィリップ・サマーティスと 2011 年にロイヤルメルボルン工科大学(RMIT)と武蔵野美術大学(MAU)の両大学による共同プロジェクト「サ운즈・オブ・ウェザー」を開始したときの私の胸の内を表している。私たちは作品の中で録音した音と「生の」音を使用する音楽家であり、作曲家である。それゆえに私たちは周囲でどんな音がするか、どう見えるか、科学技術の使用のあるなしにかかわらず私たちがいかにそれらを知覚することができるかなど、周囲に対して関心を持つのである。私たちの音楽作品は、時間と同様に、場所という観点からも進化を遂げ、それらは私たちを取り巻く世界の変化を知覚することとたいへんよく結び付けられる。そしてケージと同じく、私たちはどうすれば周囲の環境に対して知性や思慮分別を持って行動できるかを模索し、そのような知性や思慮分別へといざなうアート作品を生み出すよう努めるのだ。

フランク・シェフェールによる録画インタビューの中で、ケージは「音楽の目的とは今という我々が生きる生活の喜びをもたらすことであり、現在の生活は歴史における他のどんなときよりも知性を必要としている。万物とはひとつの知性のようである。そして知性はそれ自体で折り合いをつける必要があり、そうすることで知性は分裂することなく、同じ星ですべての他者と共に生きる喜びが生まれるのだ。」(5)と述べている。歴史における他のどんなときよりも、私たちは「個人が分裂する」とはどういうことなのか、「個人と折り合いをつける」とはどういうことなのか考えなければならない。またすべての他者、ものとどのような繋がりにあるのか理解する必要がある、これは「サ운즈・オブ・ウェザー」プロジェクトの目的のひとつである。

2011 年秋にフィリップ・サマーティスが客員教授として武蔵野美術大学を訪れた際に、彼がもたらした音に関する衝撃的な作品のひとつは、南天オーロラの録音を聞けるようにしたことである。私たちは 20 分間、南極大陸の空で数カ月の間何が起こっていたかについて耳を傾けることができた。それは地球の磁場によって捕捉された太陽風である(これは絶え間なく太陽から放出される粒子を指す)。これらの粒子や大気中の原子、分子の衝突によってエネルギーはオーロラの形体をもって放出され、極のまわりの広範囲の空においてその姿を見せる。また長い時間をかけて原子のこのような運動を記録すること、そしてこの情

sities, RMIT (Royal Melbourne Institute of Technology) and MAU (Musashino Art University, Tokyo). We are each musicians and composers who are using both recorded sounds and “live” sounds in our compositions, and therefore concerned with our surroundings: how they sound, how they look and how we can perceive them with and without the use of technology. Our musical works develop in space as well as in time, and are very often linked to the perception of changes in the world, which surrounds us. And like Cage, we wonder how it is possible to act with intelligence and conscience toward our environment, and try to make artworks that are an invitation to such intelligence and conscience.

In a filmed interview by Frank Scheffer, Cage states that « the purpose of music is to bring about an enjoyment of the life we're living and that life now, more than any other time in history, involves mind. (...) The whole creation is like a single mind. And that mind needs to come to terms with itself, so that it is not split against itself, and so that there can be the enjoyment of being alive with all the other people on the same planet » (5). More than any other time in history, we have to think about what is “to split against oneself” and what is “to come to terms with oneself”, we have to understand how we are related to everybody else and to everything else, and this is one of the purposes of the “Sounds of Weather” project.

One of the most striking sound pieces, which Philip Samartzis brought with him in Fall 2011 during his visit as a guest professor at MAU, was the recording of Aurora Australis made audible. We could listen during 20 minutes to what had happened during several months in the sky above the Antarctica—the solar winds (ions continuously flowing outward from the Sun) trapped by the Earth's magnetic field. Collisions between these ions and atmospheric atoms and molecules release energy in the form of auroras appearing in large circles in the sky around the poles, and it is possible to record these movements of atoms over time and transform this information data into sound. Being able to witness the energy and the grace of the movements of auroras through a surround sound system was an amaz-

報資料を音へと転換することが可能である。オーロラの動きの力強さや優美さを、サウンドサウンドシステムをとおして目の当たりにできるのは素晴らしい体験である。これによって私たちは耳や身体で音色の感覚（それは複雑な乱気流のような音を発する）のみならず、空間の感覚を味わうことができた。つまり、たとえその録音が人間の感覚に合わせるために時間的尺度に手が加えられたとしても、私たちはオーロラを実体験することができたのである。

オーロラは太陽風の影響を受ける土星や木星といった他の惑星でも観測されてきた。さらに、私たちは今では宇宙における様々な物理的現象からのデータを実際に音（また光やほかの媒体）へと転換することができ、そしてそれを音や光の作品として聞いたり見たりすることができる。このようなデータは人間のエゴや自我の表れではなく、人間の感覚や感情によって導き出されるものである。しかしながら、この抽象的なデータを音や光といった知覚的な事象へと転換すること、そして人間の感覚に合うように縮小することによって、私たちは数字ではなく、人間の感覚によって知覚できる何らかの他の媒体を通して、事象を理解することが可能となるのである。このように事象を聞く、そして見るという行為は深い感情を呼び起こすことができる。アーティストの課題はこの情報を形あるものへと転換することであり、これは楽しみなことであると同時にそうすることで私たちは自分自身が他者、そして自己と相反する存在ではないと理解することができる。

以上までのことは私たちがフィールドワークのセッションのなかでサイモン・ペリー、ドミニク・レッドファーン、フィリップ・サマーティス、クリステン・シャープ、そして学生である小高沙里、小牧葉奈、宮本一行、島崎隆輔、武本拓也、鶴飼祐子、宇治田枝里、八尋南実、清水裕美と交わした議題の一部である。このセッションは私たちの作品—これはもちろんデータを聞くことができるようにすることにすることに留まらず、様々な媒体を使用する—へのきっかけ、刺激となった。この本は文章、アーティストの声、写真を用いながら「サウンズ・オブ・ウェザー」プロジェクトについて説明しているが、音声、動画、この本に載せているものとは別の写真といった他の記録については以下のウェブサイトからアクセスすることができる。
<http://bogongsound.com.au/>

ing experience. It brought to our ears and body not only the sensation of timbre (it sounded like complex wind turbulences) but also the sensation of space—we could enjoy a real experience of the aurora, even if the time scale had been resized to fit human perception.

Auroras have been observed on other planets, Saturn and Jupiter, which are subject to solar winds. By extension, we can now virtually turn into sound (or light or any other media) data exuding from any physical phenomena in the universe, and listen to it or watch it over time as a sound or a light composition. This data is not the expression of human ego or self, dictated by one's feelings and emotions. However, transforming this abstract data into sensible phenomena like sound or light, and rescaling it to fit human perception, enables us to sense phenomena not only in the form of numbers, but in any other media perceptible by our senses. Listening and watching these phenomena can trigger deep emotions. The task of artists is to transform this information into a form and scale, which is enjoyable and could help us understand that we are not split against the rest of creation or against ourselves.

These were some of the subjects of the conversations we had during our fieldwork sessions with Simon Perry, Dominic Redfern, Philip Samartzis, Kristen Sharp, and the students: Kodaka Sari, Komaki Kanna, Miyamoto Kazuyuki, Shimazaki Ryûsuke, Takemoto Takuya, Tsurukai Yûko, Ujita Eri, Yahiro Minami, Shimizu Yumi, which triggered and inspired our works, which are of course not only audible, but use all kinds of media. This book documents the “Sounds of Weather” project, with texts, artists' statements and photos, while other documents: sounds, movies and other photos are accessible from the related website: <http://bogongsound.com.au/>

Notes:
(1) Henry-David Thoreau, “Journal”, Vol. 9, p. 244-245, quoted by John Cage in “Empty Words”, Marion Boyars, 1980, p. 3: « Music, he said, is continuous; only listening is intermittent ».

注：
(1) ヘンリー・デイヴィッド・ソロー「ジャーナル」、Vol.9 p.244 – 245 [ジョン・ケージ「エンプティ・ワーズ」、マリオン・ボイヤーズ社出版、1980年、p.3：“Music, he said, is continuous; only listening is intermittent.”より引用]
(2) <http://marjorieperloff.com/stein-duchamp-picasso/goldsmith-weather/>
(3) & (4) ジョン・ケージ「エンプティ・ワーズ」、マリオン・ボイヤーズ社出版、ロンドン、1980年、p.4 – 5
(5) フランク・シェフェールによるジョン・ケージの録画インタビュー “How to get out of the cage”、45'25” – 47'02”、ユーロアーツDVD、2012年。

(2) <http://marjorieperloff.com/stein-duchamp-picasso/goldsmith-weather/> Accessed 10 December 2012
(3) & (4) John Cage, “Empty Words”, Marion Boyars LTD, London, 1980, p. 4-5.
(5) John Cage, in Frank Scheffer's film “How to get out of the cage”, EuroArts DVD, 2012, 45'25”~47'02”.

クリステン・シャープ

スタジオコーディネーター、 RMIT 芸術学部

「気候は記録され、天気は経験される。」(Ingold and Kurtilla, 2000: 187 頁)

私たちが毎日出会う天気は、主観的で感覚的な経験をとおして立ち現れるが、科学的アプローチにおいて気象の事象が解釈されるときには、普通、量化できて実証できる解釈——気温、降水、風、生物量、太陽活動、海面の高さ——が決め手になる。気候の状態は統計によるデータ、そして比較や平均値という、毎日の社会心理的な経験と正反対のものをとおして測定される。

月ごとの平均値によると、この世界は毎日小雨が降り、曇りがちで、霧がかかっているということになる。これは私たちの現実の世界とは非常に異なる世界だ。私たちの現実の世界には、晴れ渡ってカラッとした日もある。(Medvigy, Kelly からの引用、2011 年)

抽象的な数字のデータと感覚的な出会いのあいだには、永遠に越えられない溝がある。天気の状態は身体をとおして理解される。つまり、暑いとき、寒いとき、土砂降りのとき、風が強くてほこりっぽいとき、また風が刺すように吹きつけるとき、身体がどのように感じるかということである。こうした経験は、触覚と感情に関わる様々な反応を引き起こす。例えば、霧雨の降る日には鬱々とした気分になり、春になるとエネルギーが満ちるのを感じ、嵐のときには崇高な力を感じるものだ。(Ingold, 2005 年)

私たちが天気に出会うとき、ひとつの感覚だけが知覚するのではない。そうではなく、聴覚と視覚と触覚のはたらきが組み合わせられ、同時に経験される。地下水槽の空間で動いている機械のキーキーいう音は、聴覚によってのみ経験されるのではない。毒を含んでいるかもしれない淀んだ水のカビ臭いにおいや、ゴムの長靴を履いた足の下に泥が沈んでいるのを感じる感覚、そうした感覚と一緒に経験される。目は見るためだけの器官ではない。私たちは目をとおして、乾燥してほこりっぽい日の砂や風、あるいは水に反射してまぶしく光る太陽の光など、環境の諸条件を触覚的に取り込み、経験する。

複数の感覚が対話するからこそ、環境に出会ったときに、奇妙でちぐはぐな感じがすることもある。例えば、エアコンで空調

Kristen Sharp

Studio Coordinator, RMIT School of Art

‘*Climate is recorded, weather experienced*’ (Ingold and Kurtilla, 2000:187).

While daily encounters with weather emerge through subjective and sensory experience, it is common for scientific approaches to dominate interpretations of meteorological events through quantifiable and empirical interpretations – temperature, precipitation, wind, biomass, solar activity and sea levels. Climate conditions measured through statistical data, comparison and averages contrast with everyday psycho-social experiences:

Monthly averages reflect a misty world that is a little rainy and cloudy every day. That is very different from the weather of our actual world, where some days are very sunny and dry. (Medvigy qtd. in Kelly, 2011).

What emerges between abstract numerical data and sensory encounters is a perceptual gap. Weather conditions are understood through the body: how it feels to be hot, cold, saturated by the rain, dusty or burned by the wind. These experiences invite a range of haptic and emotional responses, such as the oppression of a drizzly day, the energy of spring or the sublime dominance of storms (Ingold, 2005).

Encounters with weather are not isolated perceptions; rather, auditory, visual and tactile modes are combined and experienced simultaneously. The shrieking sound of machinery at work in subterranean water-storage spaces is not just an insulated auditory experience; it coexists with the musty smell of stagnant, potentially toxic, water and the feel of a silty floor under protective rubber gum-boots. Eyes are not just instruments of sight, they are haptic portals through which we experience environmental conditions: grit and wind on a dry dusty day, or the glare of sunlight reflecting off the water.

Dialogues between the senses can also create strange and disorientating encounters with the environment: sitting in an air-conditioned hotel listening to the sound of machinery cooling the air while staring out at heatwaves

管理されたホテルのなかにおいて、機械が空気を冷やす音を聞いているとき、窓の外を見ると熱が波のようにゆらめき、汗をかいた人たちが道を歩いているのに気づく、そうしたときである。こうした感覚の相互作用によって、私たちは空間と時間において特定の天気の状態を認識し、場所の感覚をつかむ。気候の状態の理解も、身体の中かで、あるいは身体をとおして、複数の知覚が経験されて相互に結びつき、組み合わせられることで形作られる。私たちは感覚の経験をとおしてこそ、自分たちの身体と精神を世界、そして空間において認識するのである。こうした知覚は訓練されて研ぎ澄まされ、人間と自然の関係を解釈し直す。現代の生活においては、人工的に冷やし、暖め、照らすことをとおして、天気に対する人間の反応が抑えられていることが多い。このことによって、身体が感覚が鈍り、場所と空間に対する関係がますます複雑になるのではないか。

人間の生体リズムと気候の生態系の関係は変化しており、その変化には、気象の新たな傾向が見られる。過去 30 年間にわたって毎日の天気は大きく変わり、しだいに不安定で予測不可能になり、以前にはもっとあった中間的な、あるいは穏やかな期間が減っている。(Medvigy and Beaulieu, 2012) これらの異常な天気は、赤道付近の国々において特に深刻な問題として実感されているが、影響は地球上のいたるところに及んでいる。特定の空間で起こった異常な天気の事象は、相互作用の連鎖を引き起こして世界中に広がった。それまでの農業のやり方は通用しなくなり、生態系が維持できなくなり、社会、政治、経済に重大な影響が及んでいる。(注 1) 海洋の温度と水面は上昇し、砂漠化が進み、生物の多様性が失われ、大気は汚染され、水も汚れ、土壌も悪化し、地球のオゾン層が変化している。これらの現象によって天気が不安定になっているのだ。このような変化は、人間の活動と環境との関係に結びついている。(IPCC website)

気候変動や人間が自然環境に及ぼす影響について議論や論争が盛んになされているとき、アートは気候と生態に関して文化的、美学的な対話を促してきた。アーティストたちは科学、政治、経済の次元において気候を語ることばに対して、人間の文化の次元からどう反応できるのかを探っている。彼らの関心は天気の状態を量的に測ることから離れ、知覚することに重きを置くようになり、天気との出会いを具体的な現象として表現している。

and sweaty bodies on streets. These sensorial interactions identify specific conditions of weather in space and time, creating a sense of place. The combination of interconnected perceptions experienced in and through the body is what forms our understanding of climatic conditions. It is through the sensory experience that we orient our bodies and mind in the world and in space. These perceptions are cultured, encoding human/nature relationships. In contemporary life responses to weather are often controlled through artificial cooling, heating and lighting. Does this de-sensitise the body or create more complex relationships to place and space?

The changing relationships between human bio-rhythms and climate ecosystems are also indicative of new meteorological patterns. Over the past thirty years everyday weather has undergone significant change, increasingly becoming more variable and erratic with less in-between or moderate periods (Medvigy and Beaulieu, 2012). While these extremes are more deeply felt around equatorial countries, their effects are distributed around the globe. Extreme weather events in one localised space set off a chain of reactions extending across the world disrupting agricultural patterns, the sustainability of eco-systems and creating significant social, political and economic impact. (1) Rising ocean temperature and levels, increasing desertification, loss of biodiversity, polluted air, contaminated water, degraded soil and changes to earth's ozone layer contribute to this increasing variability. Such changes are linked to human activities and relationships with the environment (IPCC website).

At a time dominated by discussions and debates regarding climate change and human impacts on the natural environment, art has stimulated cultural and aesthetic dialogue about climate and ecology. Artists explore the human-cultural responses to the scientific, political and economic dimensions of climate discourse. Artists move the emphasis away from quantitative measures towards perceptions of weather conditions, accounting for embodied and phenomenological encounters.

アートと環境

この 10 年間、アートにおいて環境というテーマが認識され、追求されることが多くなっている。その試みはアートと生態の関係を扱うだけでなく、気候変動のような環境問題を作っている社会・政治的な諸条件に対して、アートやアーティストがどのような役割を果たしうのかという問題に及んでいる。(注 2) このテーマは目新しいものではなく、さかのぼると 18 世紀のロマン主義、そしてそれ以前のアルブレヒト・デューラーやレオナルド・ダ・ヴィンチの作品に見られるように、早い時代のアートにおいて自然と景観が表現されていたことに見出せる。1960 年代以降は、アルテ・ボーベラ、ランド・アート、またアクティビスト・アートに関わるアーティストたちが、生態と政治について強く主張してきた。環境という空間に関わるときに具体的に実行することに関心をもつのも、そうした主張のひとつの形であり、例えばヘイミツシュ・フルトン、リチャード・ロング、アラン・カブローらの作品に、そうした関心が表れている。カブローの「ミティオロロジー」(1972) は、ドイツのデュッセルドルフで行われたハプニングであり、これに巻き込まれた人たちは雨のなか、防水シートの下を溝に向かって歩き、シートに溜まった水を溝に返すという経験をした。この作品において参加者は、過程に導かれるアートと毎日の状況との出会いに改めて目を向けることになる。

天気の効果を使った表現を試みた最近の例としては、オラファー・エリアソンの「ウェザー・プロジェクト」(テイト・モダン、2003) が挙げられる。エリアソンはテイト・モダンのタービン・ホールの端に単一周波数のランプを取りつけ、現実離れた室内環境を作った。この作品は光で照らすことによって人工的な天気の環境を作り、見る者と空間との関係に注意を向け、現象の過程と知覚的な出会いに焦点を当てている。

似た作品として、中谷芙二子と高谷史郎による「クラウド・フロレスト」(山口情報芸術センター、2010) があり、これは室内において霧と太陽の光と音を結びつけたアート・インスタレーションである。(注 3) この作品は、内と外の空間のあいだで作用し合う人工的な環境と自然の環境の關係に焦点を当てたものである。刻々と変わっていく自然の要素、つまり光、大気、雨が室内のギャラリーに入り込み、機械で作り出された霧に影響を与える。これらの相互作用をとおして、この空間は活性化され

Art and environment

Over the past decade there has been an increased recognition and exploration of environmental themes in art, examining not only the relationship between art and ecology, but also the role of art and the artist in relation to socio-political conditions of environmental issues, such as climate change. (2) These are not new themes and can be traced back to early representations of nature and landscape in art, such as Romanticism in the 18th Century and earlier in the work of Albrecht Durer and Leonardo Da Vinci. Since the 1960s there has been a distinct emphasis on ecology and politics from artists associated with Arte Povera, Land Art and Activist Art. This has included an interest in embodied practices in relationship to the spaces of the environment, such as the work of Hamish Fulton, Richard Long and Allan Kaprow. Kaprow's *Meteorology* (1972), a happening in Dusseldorf Germany, involved participants walking in the rain towards a bay under a tarpaulin and returning the water gathered into the bay. The work re-orientates participants towards process-driven art and encounters with everyday situations.

A more recent example of artists experimenting with weather effects is Olafur Eliason's *The Weather Project* (Tate Modern, 2003). Eliason installed a series of monofrequency lamps at one end of the Tate's Turbine Hall to create a surreal interior environment. The work focuses on phenomenological processes and perceptual encounters, using the luminance of light to create an artificial weather environment, drawing attention to the relationship between audience and space.

Similarly, *Cloud Forest* (Yamaguchi Center for Arts and Media, 2010) by Fujiko Nakaya and Shiro Takatani combines fog, sunlight and sound in an indoor art installation. (3) The work focuses on the relationship between artificial and natural environments operating between indoor/outdoor spaces. Real-time elements, light, air and rain enter the indoor gallery, influencing the machine-generated fog. The space is activated through these interactions and the work is designed to respond and adapt to the changing interior and exterior environments. The work includes

るのであり、作品は変化する室内と室外の環境に対応し、合わせるようにデザインされている。この作品には音の風景も含まれており(デイヴィッド・チューダーに影響を受けている)、指向性スピーカーを利用し、インスタレーションを経験している人たちの動きに応じて、様々な面に音を反響させている。この作品はありふれた空間を、触れて、見て、聞く感覚をとおして、意識的に再構成している。

アーティストたちは作られた状況と自然の状況から成る様々な状況において、天気や場所と出会うことについて表現し、探求しているが、「サウンズ・オブ・ウェザー」もそうした例のひとつである。「サウンズ・オブ・ウェザー」は様々な時間と空間にわたって起こる聴覚と視覚を刺激する現象に注目することによって、環境の変化と効果を調べ、天気の事象がどのように特定の状況や人間の経験を形作るのかということについて理解を深める。

サウンズ・オブ・ウェザー

「サウンズ・オブ・ウェザー」は、作られた環境と自然の環境に天気が及ぼす効果を扱い、音、ビデオ、写真とパフォーマンスによって表現する。この作品群は日本とオーストラリアにおける特定の気象と環境の状態——東京の隅田川、東京湾、埼玉の首都圏外郭放水路、オーストラリアのメルボルン、そしてオーストラリア・アルプス山脈のボゴン高原——を探ることをとおして生み出される。これらの場所は天気と物質的環境の関わりのなかにあり、それぞれ固有の歴史と、文化的、産業的役割をもっている。これらの場の多くは都会の日常生活のなかで普通に訪れることができるところだが、目につかないことが多く、あまり意識されていない。

このプロジェクトは、場所を知覚するときに必要な要素となる気候の状態に光を当てている。以下に示す 3 つの例によって、私たちはこのプロジェクトのあいだに経験された天気について考察することができる。東京湾にボートを浮かべて行うフィールドワークでは、普段は道から、また車や電車の窓をとおして見る都市の見え方とは違うものを見ることができた。この都市で仕事をし、この都市を知っているアーティストでさえ、海の上に出ることをきっかけに、この都市を新たな方法で探ることができた。この知覚は、天気をとおして作り出される独特の身

a soundscape (influenced by David Tudor) using directive speakers, responding to the movement of audiences through the installation and reflecting different surfaces. The work deliberately re-imagines familiar space through the senses: touch, sight and sound.

Sounds of Weather is another such example of artists reflecting and exploring encounters with weather and place in a range of built and natural contexts. By concentrating on acoustic and visual phenomena over different times and spaces, *Sounds of Weather* interrogates the variation and effects of the environment and develops an understanding of how weather events shape specific contexts and human experience.

Sounds of Weather

Sounds of Weather responds to the effects of weather on the built and natural environment in the creation of sound, video, photographic and performance art. The works are generated through investigation of specific meteorological and environmental conditions in Japan and Australia: Sumida River, Tokyo; Tokyo Bay; Metropolitan Area Outer Underground Discharge Channel, Saitama; Melbourne, Australia; and, Bogong High Plains in the Australian Alps. Each of these places has a unique history, as well as cultural and industrial roles, in relation to the weather and material environments. While many of these sites are publicly accessible in everyday urban life they are often invisible or not consciously considered.

The project highlights climatic conditions as a dominant feature in the perception of place. Three such examples provide insight into the weather experienced during the project. The boating fieldwork on Tokyo Bay offered different perspectives of a city normally viewed from street level or through car and train windows. Even for local artists, being out on the water offered an opportunity to explore the city in a new way. This perception was framed by the distinct bodily encounters produced through the weather. The light, cloud and smog conditions created an imperceptible division between water and sky. Grime, grit and river water was felt on the skin, and the smell of diesel and salt

体的な出会いによってできあがった。光、雲、スモッグの諸条件によって、水と空の区別は知覚できなくなった。ほこり、砂、川の水は皮膚の上で感じられ、ディーゼル燃料と塩の強いにおいがした。ボートに伝わってくる音の風景は、羽田空港で離着陸する飛行機の騒音によって妨げられた。サイモン・ペリーとクリステン・シャープはこの経験を一連の写真で表現した。これらのイメージは、場やフィールドワークについて文書にすることでは表現できないもの、つまり天気の効果時間が時間のなかで物質として表れること、また人間の活動と自然の環境が対照的であるということに焦点を当てている。彼らの写真は空間、また気候と環境との出会いを再構成している。

埼玉にある巨大で現実離れした規模の地下放水路（首都圏外郭放水路）は、広大な地下の複合施設で、豪雨や台風の際にここに水を溜めることで、川が氾濫して洪水にならないようにデザインしてある。（Metropolitan Area website）（注4）この施設を訪れると、都市の目につかない、しかし重要なインフラをとおして現実離れした経験ができる。フィールドワークは59本の柱を有する24.5メートル×177メートル×78メートルの大きなコンクリートの調圧水槽のなかで行われた。この水槽は水を溜めてから、江戸川の河川システムに送り返すようにデザインされている。これは地下に隠れた空間であり、空気の質と湿度の状態は人間の身体に合うものではなかった。そこは別空間、別世界だった。この地下世界の規模と機能は圧倒的で、都市を守るために自然の力に耐え、それを抑え込むように造られているのだが、私たちに自然の力、つまり水、洪水、雨の力を知らしめる。最近起こった東北と福島における3月11日の出来事によって、この地域に集まって溜まる水の危険性も考えられるようになった。アーティストたちは意識的に壁に触れ、空気を吸い込んで吐き、床の小石に触れてみた。この空間の音響効果によって、タンクの底から沈殿物を取り除くために使われている機械の騒音が増幅されていた。これにまたアートのためのフィールドワークにともなう騒音、雑音——カメラのシャッター音、空間を活性化する打楽器の音と声——が重なった。巨大水槽は機能的な貯水槽から姿を変え、パフォーマンスのための巨大な舞台、演出と実験の場になった。地下で数時間を過ごした後、100段もの階段を上り、日光に溢れた大気のなかに出てきたときには、妙にほっとした。こうした経験は「ウェザー・マン」のようなアート作品にも表現された。この作品はマルチ・

was thick. The soundscape of the boat was interrupted by the noise of planes taking off and landing from Haneda airport. Simon Perry and Kristen Sharp represented these experiences in a series of photographs. These images move beyond documentation of sites and fieldwork to focus on the materiality of weather effects over time, and the contrast between human activity and the natural environment. The photographs re-imagine spaces and encounters with climate and environment.

The gigantic and surreal scale of the Saitama underground water discharge channel (*shutoken gaikaku hôsuïro*), a huge underground mega complex designed to prevent overflow and flooding during heavy rains and typhoons by storing water (Metropolitan Area website),(4) offered a surreal experience of invisible yet critical urban infrastructure. Fieldwork was conducted in the large concrete surge tank, 24.5m x 177m x 78m with 59 pillars, which is designed to hold and then pump water back into the Edogawa river system. This was a space hidden underground, and the air quality and moist conditions were not conducive for the human body. This was another space, another world. Overwhelming and built to withstand and contain forces of nature to protect the city, the scale and function of this underground world was designed to make you aware of natural forces, water, flooding and rain. Recent events of 3.11 in Tôhoku and Fukushima heightened the awareness of the dangers of stagnant, pooling water in the region. The artists were highly aware of touching the walls, breathing the air and making contact with the puddles on the floor. The acoustics of the space amplified the noise from machinery being used to clean the residue from the bottom of the tank. This was superimposed with the noise and clutter of artistic fieldwork: cameras clicking, percussion instruments activating the space and voices. The tanks were transformed from functional storage tanks into a giant performance venue, a site of play and experimentation. After spending hours underground it was a strange relief to surface into the sunny air, after climbing 100 steps. Such experiences were reflected in artworks such as *The Weather Man*. This live multi-media performance activates the spaces between chaos and control. By mimicking

メディアを駆使したライブ・パフォーマンスで、混沌と管理の狭間にある空間を活性化している。この作品では、一方でテレビに出てくる天気予報士の慣習的な伝え方がまねられ、他方で破壊的な天気との主観的な出会いが感覚的なイメージと音によって表され、両者が並べられている。そのことによって私たちは、異常な天気の時象の効果は言い表せないということを思い起こし、また異常な天気は予測できないということを感覚的に知る。この作品は3月11日の出来事を直接的に表しているわけではないが、人間と自然の関係に出会い、表現し、考え直すための空間を作っている。

東京のフィールドワークが行われた都会の場とは異なり、オーストラリアのアルプス山脈国立公園にあるボゴン高原では、天気と環境に別の形で出会うことができた。その水は澄んでいて、東京ともメルボルンとも違う。メルボルンでは水道水を飲むが、その水は塩素の味がする。しかし、高山の水はきれいで冷たい。このフィールドワークは、水のシステムに関わるインフラについて探るきっかけとなった。そのシステムとはキーウオ水力発電システムで、排出物を出さずに毎年新しい再生可能な電力を作るようにデザインされており、化石燃料による動力の代わりとなるものをオーストラリアで生み出している。（AGL website）この地域はまた、変化する気温や地球の気候変動をツンドラの環境と動物相に基づいて探る科学的調査にとって、重要な場でもある。環境自体は2003年に起こった東部ヴィクトリア・アルプスの山火事の後、大きく変わり、燃えた木々が今もロッキー・バリー・ダムなどの地域を取り囲んでいる。これらの木々は常に、自然が姿を変えていく過程を思い起こさせる。このプロジェクトに関わった別のアーティストたちは、この地域、ダム、川、湖と変電所の音の風景を扱い、電気音響で地形を表現しようとした。HACOとフィリップ・サマーティスのコラボレーションの例のように、こうした作品の多くが、都会から離れた特殊なこの土地を、文化によって調整された音で表現している。

こうした出会いをとおして作り出されるアート作品は、必然的に天気の身体的、物質的経験を引き起こし、伝える。このプロジェクトのために作られた作品は、場所を直接的に変化させようとしているのではない。そうではなく、アーティストはそれぞれ自分自身の経験をして、これらの場を解釈し、芸術、文化、

the conventional communication methods of a television weatherman and juxtaposing these with subjective encounters of catastrophic weather, based on the sensorial images and sounds, this work evokes the unspeakable effects and sense of unpredictability of extreme weather events. While not created as a direct analogy of the events of 3.11, this work creates a space to encounter, express and re-consider human/nature relationships.

Unlike the urban sites of the Tokyo fieldwork, the Bogong High Plains, in the Alpine National Park, Australia presented a different kind of encounter with weather and environment. The water was clear, unlike Melbourne where tap water tastes of chlorine; alpine water is pristine and cold. The fieldwork offered an opportunity to explore the infrastructure related to the water system: the Kiewa Hydroelectric Scheme—designed to produce emission-free new renewable electricity per year, providing a strong alternative to fossil fuel generated power in Australia (AGL website). The region is also a significant site of scientific research into changing temperatures and global climate change based on Tundra environments and fauna. The environment itself was altered radically after the 2003 Eastern Victoria Alpine bushfires and the burnt trees still surround areas such as Rocky Valley Dam. These are constant reminders about the transforming processes of nature. Different artists working in the project responded to the soundscapes of this area, dams, rivers, lakes and substations, capturing the electro-acoustic topography. Many of these works, such as the collaborations between Haco and Philip Samartzis, create a culturally blended sonic response to this unique remote region.

The artworks produced through these encounters inevitably evoke and communicate some of these bodily and material experiences of weather. The works created for this project are not seeking to establish a direct translation of place. Rather each artist is taking their own experience and interpretation of these sites and translating them through art, cultural and environmental discourses, and material and social dimensions. Places defy closed interpretations or representations because they are con-

環境に関わることば、また物質と社会の次元をとおして表現し直すのである。場所は解釈や表現を完結させない。なぜなら場所はそのような社会的、物質的、象徴的な過程と実行をとおして、常に新しく形作られているからである。だからといって、場所の特性を否定するわけではない。ただ、このように考えることで、場所は固定された地域だけでなく、様々な力との関係において形作られるということが認識できるのだ。天気の場合、まさに文字どおりそうである。地球上のある部分における天気の事象は、必然的に別の空間と効果につながっている。

「サウンズ・オブ・ウェザー」は天気の実実の状況と空間の様々なあり方を探ったが、これらの効果がどのように理解されるかは、文化的に理解することをとおして変わってくる。物質的、感覚的、社会的環境との関係は、地域ごとの経験と地球規模の関係をとおして作り直される。このプロジェクトの成果の展示のなかには、「ボロウド・ランドスケープ」というタイトルのものがあり、このタイトルは日本語の「借景」、つまり「借りた風景」ということばに由来する。「借景」においては、遠くの眺めと庭の構成物が互いに結びつき、ひとつのまとまった眺めになる。こうした関係は、特殊な庭をより大きな背景の空間につなげる。同様の意味で、「サウンズ・オブ・ウェザー」プロジェクトの多様性——様々な空間、文化、時間の超越——によって、多様な声と天気の知覚が現れ、経験された。このプロジェクトにおいてアーティストたちは、合作という形での会話をとおして、これらの要素をつなげることに積極的に取り組んでいる。

注：

(1) 国際連合の機関である世界気象機関〔WMO〕は、気象の問題には境界がないということを認めている。「天気、気候、水の循環に国境は関係ないので、地球規模での国際的協力が不可欠である」。(WMO website)

(2) 注目に値する展示がたくさんあったー「ラディカルな自然ー変わりゆく惑星のためのアートと建築 1969–2009」展（ロンドン、2009）、「地球ー変わりゆく世界のアート」展（ロイヤル・アカデミー）、「天気予報ーアートと気候変動」展（ボールドー現代アート美術館、コロラド、2007）、「燃える水ーアートと気候変動」展（自然史博物館、ロンドン、2006）、「熱ーアートと気候変動」展（ロイヤル・メルボルン工科大学ギャラリー、メルボルン、2008）、「ネイチャー・センス」展（森美術館、東京、2011）。もう

stantly being reformed through such social, material and symbolic processes and practices.This does not deny the specificity of place, but acknowledges that place is formed in relation to a range of forces rather than just a fixed area.This is of course very literal in the case of weather. Weather events in one part of the world are inevitably connected to other spaces and effects.

Sounds of Weather explored a range of actual situations and spaces of weather, but how those effects are understood is mediated through cultural understanding.The relationship to the material, sensory and social environment is re-configured through local experiences and global relationships. The title of one of the exhibition outcomes in the project, *Borrowed Landscapes*, is adapted from the Japanese term *Shakkei* (借景) (5) or 'borrowed scenery'. Shakkei interconnects distant vistas and garden objects into a cohesive view.These relationships link the specificity of the garden into a larger contextual space. In a similar way, the diversity of the *Sounds of Weather* project—across different spaces, cultures and times—allows for a variety of voices and perceptions of weather to emerge and be experienced.The artists in this project actively engage in connecting these elements through collaborative conversations.

Notes:

AGL Hydro, <http://aglbogonghydro.com.au/>, Accessed 10 June 2012.

(1) The World Meteorological Organisation, an agency of the United Nations, recognises the unbounded nature of meteorology: “As weather, climate and the water cycle know no national boundaries, international cooperation at a global scale is essential.” (WMO website).

(2) A number of notable exhibitions include *Radical Nature: Art and Architecture for a Changing Planet 1969 – 2009* (London, 2009), *Earth: Art of a Changing World* (Royal Academy), *Weather Report: Art and Climate Change* (Boulder Museum of Contemporary Art, Colorado, 2007), *Burning Ice: Art and Climate Change* (Natural History Museum, London 2006), *Heat: Art and Climate Change* (RMIT Gallery Melbourne, 2008) and *Sensing Nature* (Mori Art Museum,Tokyo 2011). Another notable project is David Buckland's

ひとつ注目すべきプロジェクトとして、2011 年に始まったデイヴィッド・バックランドの「ケイブ・フェアウェル・プロジェクト」が挙げられる。このプロジェクトは気候変動に対して文化がどう反応するかということを強調している。

(3) このインスタレーションは次の URL にアクセスして見ることができる。
<http://www.youtube.com/user/YCAMArchives>

(4) 私が最初にこの地下空間のことを知ったのは、内山英明の写真(2001)をとおしてであった。

Cape Farewell Project started in 2001, which emphasises cultural responses to climate change.

(3) For a view of the installation go to: <http://www.youtube.com/user/YCAMArchives>

(4) I first encountered this subterranean space through the photographs of Hideaki Uchiyama (2001).

(5) *Shakkei* is a central practice in Japanese landscape design that brings foreground elements into relationship with background space and distant views, such as surrounding mountainscapes.

References

AGL Hydro, <http://aglbogonghydro.com.au/>, Accessed 10 June 2012.

Ingold, Tim and Kurtilla, Terhi (2000), ‘Perceiving the Environment in Finnish Laplad’, *Body & Society*, 6: 3-4, pp. 183 – 96.

Ingold, Tim (2005), ‘The eye of the storm: visual perception and the weather’, *Visual Studies*, 20:2, pp. 97-104

IPCC (Intergovernmental Panel on Climate Change) (2007), *Climate Change 2007: Working Group 1: The Physical Science Basis*, http://www.ipcc.ch/publications_and_data/ar4/wg1/en/faq-2-1.html. Accessed 27 December 2012.

Kelly, Morgan (2011), ‘Erratic, extreme day-to-day weather puts climate change in new light’. *News at Princeton, Current Stories*, November 15. <http://www.princeton.edu/main/news/archive/S32/13/25102/index.xml?section=topstories>. Accessed 27 December 2012.

Medvigy, David and Beaulieu, Claudie (2012), ‘Trends in Daily Solar Radiation and Precipitation Coefficients of Variation since 1984’, *Journal of Climate*, 25: 4, pp. 1330 – 1339.

Metropolitan Area Outer Underground Discharge Channel, <http://www.ktr.mlit.go.jp/edogawa/project/gaikaku>, Accessed 10 June 2012.

World Meteorological Organisation, http://www.wmo.int/pages/index_en.html. Accessed 10 June 2012.

Project 1

隅田川、東京
Sumida River, Tokyo

2011.11.1

多摩川、鶴見川、荒川そして利根川と、東京は、4つの主要な河川を持っている。通常は、西側の山々から水を集め東京湾に流れていく。

得に1950年代以降、戦後の都市の拡張により、河川の氾濫が多くあった。1980年代、東京での河川の氾濫を防ぐため、地下河川と排水システムの設計した。

隅田川は、東京を縦断し東京湾に排水される。この川は明治時代以降に荒川から人工的に分流された。

Tokyo has four major river systems: Tamagawa, Tsurumigawa, Arakawa and Tonegawa. Generally they collect water from the mountains in the West and drain into Tokyo Bay.

Flooding of these river systems was particularly common in the 1950s due to rapid urban postwar expansion. From the 1980s a program was designed to prevent the flooding of Tokyo through the design of underground river and drainage systems.

The Sumida River (Sumidagawa) flows through Tokyo draining out to Tokyo Bay. The river was created after the artificial diversion of Arakawa during the Meiji period.







Project 2

地下貯水蔵、 埼玉
Underground Water Storage,
Saitama

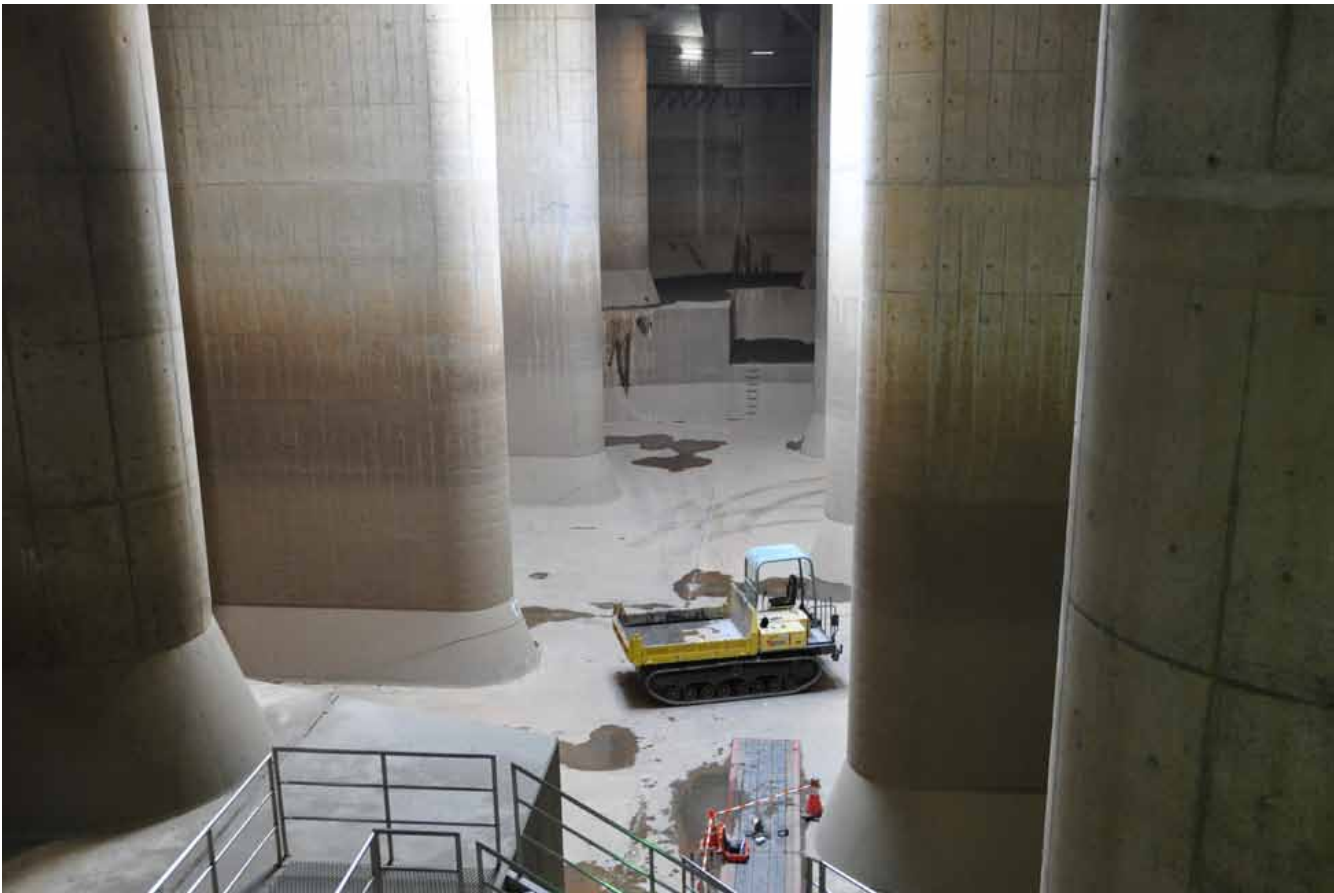
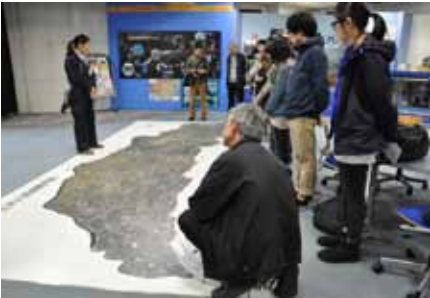
2011.11.2 / 11.4

埼玉にある首都圏外郭放水路の地下は、大雨や台風時の氾濫や洪水を防ぐように設計された貯蔵施設である (<http://www.ktr.mlit.go.jp/edogawa/project/gaikaku>)。この構造物は江戸川区の氾濫区域の農地での都市の拡張の影響を緩和するために設計された。

構造としてはネットワークのパイプと地下50メートルの貯蔵タンクの直列で構成されており、世界でも最大規模のエンジニアリング・プロジェクトの一つである。フィールドワークは江戸川水系に水を貯蔵、排出できる24.5 x 177 x 78メートルの59本の柱によって構成された巨大なコンクリート・サージタンクの空間で行われた。

The Tokyo Metropolitan Area Outer Underground Discharge Channel (Shutoken Gaikaku Hôsuiri) in Saitama, is an underground storage facility designed to prevent overflow and flooding during heavy rains and typhoons (<http://www.ktr.mlit.go.jp/edogawa/project/gaikaku>). The structure is designed to mitigate the effects of increasing urbanisation on agricultural land in the Edogawa flood basin.

The system consists of a series of network pipes and storage tanks 50 m underground, and is one of the largest engineering projects of its type in the world. Fieldwork was conducted in the large concrete surge tank, which is 24.5 m x 177 m x 78 m with 59 pillars and is designed to hold and then pump water back into the Edogawa river system.





Project 3

東京湾、東京
Tokyo Bay, Tokyo

2011.11.5

東京は、日本と欧米の接点として重要な役割を果たしている。1850年代に行われた、ペリー提督との早期対話、その後も様々な交渉の場であった。主に江戸時代からの人工島や土地造成などで構成されており、産業、娯楽施設、交通機関や居住空間に囲まれていたのである。

東京の地形は江戸徳川時代（1603～1867）により一層の変化を示すが、それがより顕著になるのは、明治時代のはじめ、江戸が東京と改称し帝国首都になった時期から、戦後の発展と復興の時代の間の時期である。



これには東京湾周辺の土地を埋め立て、河道の再接続と深化も含まれる。特に洪水対策に
関した河川システムの変更は、軍事的利益
と都市計画の拡大に対応したものであった。

Tokyo plays a significant role in Japan
and Euro-American contact: it is the site
of Commodore Perry's early dialogues in
the 1850s as well as subsequent negotia-
tions. It largely consists of a series of
artificial islands and land reclamation,
some of which date from the Edo period.
It is surrounded by industrial, recreation-
al, transport and residential spaces.

The topography of Tokyo has undergone
a series of significant interventions
starting during the EdoTokugawa period
(1603–1867), but more significantly during
the Meiji period, when Edo was renamed
Tokyo and became the Imperial Capital
City of Japan, and more recently during
the post war expansion and rebuilding.
These include land reclamation around
Tokyo Bay and the redirection and deep-
ening of river channels. The changes to
the river system were partly in response
to the alleviation of flooding, military in-
terests and also an expanding urbanism.





Project 4

ボゴング山アルパイン村
ボゴン・ハイプレーンズ、ビクトリア、オーストラリア
Bogong Alpine Village
Bogong High Plains, Victoria, Australia

2012.2.19 – 26

ボゴング山のアルパイン村は、メルボルンの325 キロ北東、アルパイン国立公園内 800 メートルの標高に位置し、マウント・ビューティーとフォールズクリークの間にある。この村は 1930 年代後半に、オーストラリアで初めて創設され本土第二位の大きさを誇るキエワ水力発電計画のために設置された。創設以来、4 つの発電所とそれに付随するダム、鉄道、変電所、発電・送電・配電のためのトンネルや水路のネットワークといったインフラを構成するために進化してきた。キエフ水力発電計画は、ロッキー渓谷および雪解け水が定期的に放出されるブリティ山の貯水池の標高 1800 メートルの場所から始まる。マッケイ川に始まりボゴン山、クローバ



一山へと続くキエワ渓谷に沿って分散し、最終的にマレー川の主要な支流であるキエワ川に流れ込む前に、山の麓で西キエワ発電所と結ばれる。

このオーストラリア・アルプスは、オーストラリアで供給される新鮮な水の 80%を国土のたった 1% の面積で生産している。大部分が国立公園に指定されており、同時に高山リゾートや水力発電計画を含む、非常に複雑な産業と商業の場所である。水力発電は再生可能エネルギーの持続可能な供給源であるとされている。大規模な土壘と複雑な技術的構造を介して、加圧水は私たちが暮らす日常空間に必要な電気を発生させるために動員される。

水の落下や流れる力を活用したインフラの範囲はタービン、ポンプ、変電所、ダム、水路など多岐にわたり、それらが自然環境に存在するありかたは、さまざまなアーティストの研究に豊富な情報源を与えてくれるものである。水を供給・収集し活用するためにできたこの自然と建築環境の関係は、おおいに複雑かつ多彩であり、エネルギー生産の持続可能な方法を取り巻く現在の談話を考慮するための魅力的な主題を提供してくれるのである。

フィールドワークは、ボゴン・サウンドカルチャー・センターで開催された。

フィリップ・サマーティス

参考文献：
ティム・インゴールドとテリ・クルチラ、「フィンランドラップランドで環境を知覚する」、ボディ＆ソサエティ #6 (3-4)、2000 年、183～196 頁。

デビッド・メチヴィジ＆クローディボーリユー：「1984 年以降の日射量変動の降水率の推移」、「J. Climate」、25、2012、1330～1339 頁。

Bogong Alpine Village is 325 kilometres North-East of Melbourne situated at an altitude of 800 meters in the Alpine National Park between Mount Beauty and Falls Creek. The village was established in the late 1930s to service the Kiewa hydroelectric scheme, the first of its kind, and the second largest overall in mainland Australia. Since its inception it has evolved to comprise four power stations and attendant infrastructure including dams, rail sidings, substations and networks of tunnels and aqueducts for the generation, transmission and distribution of electricity. The scheme begins at an altitude of 1800 meters at Rocky Valley and Pretty Valley reservoirs where snowmelt is periodically released into an interlinked series of power stations and dams distributed along the Kiewa Valley starting with McKay Creek and followed by Bogong and Clover, concluding with the West Kiewa power station at the foot of the mountains before its eventual release into the Kiewa River, a major tributary of the Murray River.

The Australian Alps produces 80% of Australia's fresh water supply yet only comprises 1% of its landmass. While the bulk of it is designated as a national park, the Australian Alps are also the site of quite complex industrial and commercial enterprises including alpine resorts and hydroelectric power schemes. Hydroelectricity is posited as a sustainable source of renewable energy. Through massive earthworks and complex technical infrastructure, pressurized water is mobilized to generate the electricity required to power the everyday spaces that we inhabit. The range of infrastructure used to exploit the gravitational force of falling or flow-

ing water including turbines, pumps, sub stations, dams and aqueducts and the manner in which they inhabit the natural environment provides a rich source for investigation for a wide range of artists. The relationship between the natural and constructed environment used to collect and exploit this water supply is quite complex and variegated, providing a compelling subject for consideration given the current discourse surrounding sustainable methods of energy production. The fieldwork took place at the Bogong Centre for Sound Culture.

Philip Samartzis

Reference
Tim Ingold and Terhi Kurtilla: *Perceiving the Environment in Finnish Lapland, Body & Society* 6 (3–4), 2000, p. 183–96.
Medvigy, David & Claudie Beaulieu: *Trends in Daily Solar Radiation and Precipitation Coefficients of Variation since 1984*, 2012, *J. Climate*, 25, p. 1330–1339.

Project 4-1

ボゴンビレッジ・レイクガイ
Bogong Village Lake Guy

2012.2.20





Project 4-2

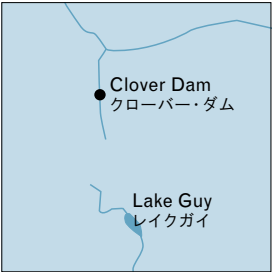
マッケイ山と
アルパインハイプレーンズ
Mt McKay and
Alpine High Plains
2012.2.22





Project 4-3

クローバー・ダム
Clover Dam
2012.2.23



Project 4-4

ロッキー渓谷ダム
Rocky Valley Dam
2012.2.24





アートワークのドキュメンテーション

Artwork 1

スーパーデラックス

SuperDeluxe

2011.11.12

参加者

クリストフ・シャルル
フィリップ・サマーティス
ドミニク・レッドファーン
サイモン・ペリー
クリステン・シャープ
宮本一行
鶴飼佑子
宇治田枝理
松井正
田島千保
山名知世
島崎隆輔

特別出演

Haco
佐藤実 -m/s

Participants

Christophe Charles
Philip Samartzis
Dominic Redfern
Simon Perry
Kristen Sharp
Miyamoto Kazuyuki
Tsurukai Yûko
Ujita Eri
Matsui Tadashi
Tajima Chiho
Yamana Tomoyo
Shimazaki Ryûsuke

Special Guests

Haco
Satô Minoru -m/s

プロジェクトの目的は、音情報から環境形成への気候変動の影響を調べることである。フィールドワークの臨場感と触感を得るために、環境音の録音素材を使用し、サラウンドサウンドのコンポジションを制作する。気象概況の経験と理解を深めるために、気象概況の音響的スペクトルを現すサラウンドサウンドのマップを作成する。

2011 年 11 月 12 日に、東京スーパーデラックスで最初のイベントを開催した。スペシャルゲストとして Haco と佐藤実 (m / s) にも出演していただいた。18:00 から 22:00 まで、スーパーデラックスのマルチチャンネル・サウンドシステムを使用したインスタレーション、ドミニク・レッドファーン、サイモン・ペリーによる映像作品の上映、Haco、佐藤実 (-m / s)、フィリップ・サマーティス、クリストフ・シャルル、武蔵野美術大学生によるライブパフォーマンスを行った。

The aim of the project is to interrogate the effects of climate change by concentrating on the propagation of acoustical phenomena over time and space to promote a deeper understanding of how weather events shape specific environments. These recordings are translated into surround sound compositions to afford immersive and tactile experiences of the field work.

During the SuperDeluxe event, held on November 12, 2011, the artists and students have presented their field research through sound installations, screenings of video works (Dominic Redfern and Simon Perry), and a series of live performances (Philip Samartzis, Kristen Sharp, Dominic Redfern, Christophe Charles, students of Musashino Art University, and special guests: Haco and Satô Minoru -m/s).



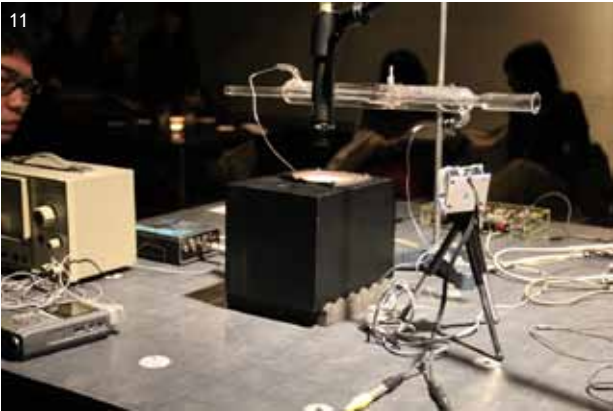
- 1,2 “The Weatherman”: Shimazaki Ryûsuke, Simon Perry, Dominic Redfern, Christophe Charles
3 “Antarctica”: Philip Samartzis
4 “Song”: Matsui Tadashi, Tajima Chiho, Tsurukai Yûko, Yamana Tomoyo

Documentation of Artworks





- 5 “Song”: Matsui Tadashi, Tajima Chiho, Tsurukai Yûko, Yamana Tomoyo
6 “The Crystal Set”: Miyamoto Kazuyuki
7 “Trombone”: Miyamoto Kazuyuki
8 “The Crystal Set”: Ujita Eri
9 “The Crystal Set”: Haco
10 “Leaves”: Dominic Redfern
11 “Thermal Acoustics”: Satô Minoru



- イベント・タイムテーブル：
18:00 ドミニク・レッドファーン：「地域」
18:40 田島千保、鶴飼佑子、松井正、山名知世：「ソング」
18:50 島崎隆輔：「ドローン」
19:00 フィリップ・サマーティス：「南極」
19:10 クリストフ・シャルル：「水っぽい地形」
19:25 サイモン・ペリー、ドミニク・レッドファーン、島崎隆輔、クリストフ・シャルル：「ウエザーマン」
19:50 宮本一行：「トロンボーン」
20:10 Haco、ドミニク・レッドファーン、フィリップ・サマーティス：「葉っぱ」
20:45 クリステン・シャープ、Haco、ドミニク・レッドファーン、宇治田枝理、宮本一行、山名知世：「The Crystal Set」
21:05 ドミニク・レッドファーン：「避難」
21:20 佐藤実：「熱音響」
21:50 フィリップ・サマーティス：「オーロラ」

- Event Timetable:
18:00 Dominic Redfern: “Tract”
18:40 Matsui Tadashi, Tajima Chiho, Tsurukai Yûko, Yamana Tomoyo: “Song”
18:50 Shimazaki Ryûsuke: “Drone”
19:00 Philip Samartzis: “Antarctica”
19:10 Christophe Charles: “Watery Terrain”
19:25 Simon Perry, Dominic Redfern, Shimazaki Ryûsuke, Christophe Charles: “The Weatherman” [p. 65 – 66]
19:50 Miyamoto Kazuyuki: “Trombone” [p. 69 – 70]
20:10 Dominic Redfern, Haco, Philip Samartzis: “Leaves” [p. 64 – 65]
20:45 Kristen Sharp, Haco, Dominic Redfern, Ujita Eri, Yamana Tomoyo, Miyamoto Kazuyuki: “The Crystal Set” [p. 66 – 67]
21:05 Dominic Redfern: “Refugia”
21:20 Satô Minoru: “Thermal Acoustics”:
21:50 Philip Samartzis: “Aurora” [p. 07 – 08]

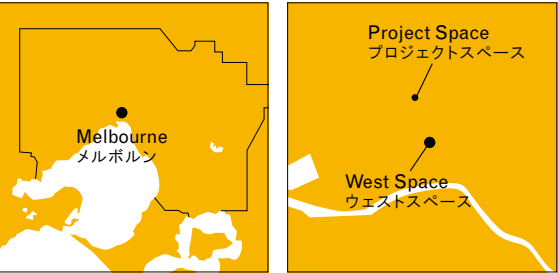
Artwork 2

ウェストスペース
West Space

2012.02.29

2011 年 11 月 12 日の東京スーパーデラックスでのイベントと同様に、2012 年 2 月 29 日のメルボルン West Space のイベントでは、音情報から環境形成への気候変動の影響を調べた上で、環境音の録音素材を使用し、サラウンドサウンドのコンポジションを制作し、パフォーマンスとして発表した。スペシャルゲストとして リジー・ポグソンに出演していただいた。4 チャンネルのサウンドシステムとビデオプロジェクターを使用し、ドミニク・レッドファーン、サイモン・ペリーの映像作品の上映、フィリップ・サマーティス、クリストフ・シャルル、リジー・ポグソン、武蔵野美術大学生によるライブパフォーマンスを行った。

Similar to the events held in Tokyo SuperDeluxe on November 12, 2011, the event of Melbourne West Space of February 29, 2012, examined the impact of climate change on the environment through sound information. The performers used recorded environmental sound as material for producing compositions of surround sound, as well as live sounds (trombone, voices, electronics) and presented several live performances using a video projector and a 4-channel sound system.



- 1 – 4 “The Weatherman”: Simon Perry, Shimazaki Ryūsuke, Dominic Redfern, Christophe Charles
- 5 “The Crystal Set”: Shimazaki Ryūsuke
- 6 “The Weatherman”: Shimazaki Ryūsuke
- 7 “The Crystal Set”: Ujita Eri
- 8 “The Weatherman”: Shimazaki Ryūsuke



- | | |
|--|-------------------------|
| 参加者
クリストフ・シャルル
フィリップ・サマーティス
ドミニク・レッドファーン
サイモン・ペリー
クリステン・シャープ
宮本一行 | 特別出演
リジー・ポグソン |
|--|-------------------------|

- | | |
|---|---------------------------------------|
| Participants
Christophe Charles
Philip Samartzis
Dominic Redfern
Simon Perry
Kristen Sharp
Miyamoto Kazuyuki | Special Guest
Lizzie Pogson |
|---|---------------------------------------|

- Tsurukai Yûko
Ujita Eri
Shimazaki Ryūsuke

Artwork 3

プロジェクトスペース
Project Space

2012.3.1 – 4.1

「借景」展

「Borrowed Landscapes」展の作家たちは、日本とオーストラリアでのフィールドワークの際に出会った気象に応じて、サラウンドサウンド作品、パフォーマンスや映像インスタレーションを作成した。気候変動の変化や効果を観察し、様々な時空間で聴覚と視覚の現象に集中する。気象現象は、特定の環境と身体を経験を形作る方法の理解を開発している。プロジェクトは、フィールドワークを通じて構築し、自然環境への天候の影響に対応するための芸術家の範囲のための開かれた枠組みを作成した。

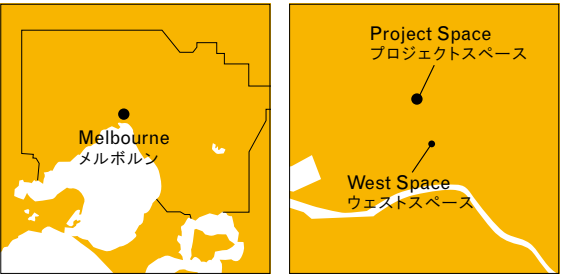
タイトルの「借景」、日本独自の言い回しで、遠くの景色や庭園の景観を相互接続することである。遠くにある風景を「借りる」ことから「借景」といわれている。これらの関係はより大きな文脈空間のなかで起きる、庭と背景の特別なリンクである。借景プロジェクトは全体を通して、異なる空間との関係の中での多様な出来事、声、自然の天候、それらを認識しながら様々な時間を体験することができる。

Borrowed Landscapes

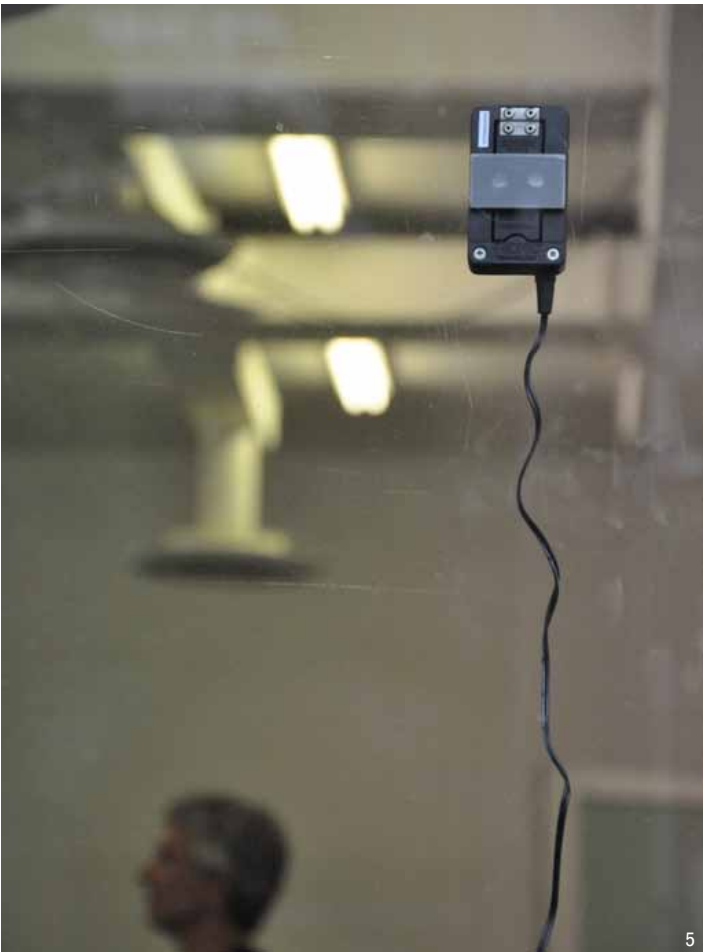
Artists in "Borrowed Landscapes" have created surround-sound compositions, performances and video installations in response to a variety of specific meteorological events encountered during fieldwork in Japan and Australia. By concentrating on acoustic and visual phenomena over different times and spaces this project interrogates the variation and effects of climate change and develops an understanding of how weather events shape specific environments and bodily experience. The project creates an open framework for a range of artists to respond to the effects of

weather on the built and natural environment through fieldwork.

The title, "Borrowed Landscapes", is adapted from the Japanese term 'shakkei' or 'borrowed scenery', which interconnects distant vistas and garden objects into a cohesive view. These relationships link the specificity of the garden into a larger contextual space. In a similar way, the diversity of the "Borrowed Landscapes" project — across different spaces and times — allows for a variety of voices and perceptions of weather to emerge and to be experienced.



- 1 Christophe Charles: "Clover Power Plant"
- 2 Tsurukai Yûko: "Dance"
- 3-4 Christophe Charles: "Bogong Soundscapes"
- 5 Philip Samartzis with Haco: Electronics and Voice



見取り図

展示作品：

- [1] フィリップ・サマーティス（電子音） & Haco（声）
- [2] クリストフ・シャルル：「クロバー発電所」（スローモーション再生によるフィールドレコーディング・インスタレーション）
- [3] 鶴飼佑子：「ダンス」（液晶スクリーンビデオ）
- [4] クリストフ・シャルル：「ボゴン・サウンドスケープ」「HCDC」（ヘッドホンのための作曲）
- [5] 宇治田枝理：東京スーパーデラックスでのイベント「サウンド・オブ・ウエザー」記録ビデオ
- [6] ドミニクレッドファーレン：「ドリップ」（液晶スクリーンビデオ）
- [7] 宮本一行：「川」（天井へビデオプロジェクション）
- [8] 島崎隆輔：「サウンド・オブ・ウエザー」（天井へのサウンドプロジェクション）
- [9] クリステン・シャープ&サイモン・ペリー：ポスターやコースター（プリント）

Exhibited Works

- [1] Philip Samartzis (Electronics) with Haco (Voice)
- [2] Christophe Charles: "Clover Power Plant" (field recording played gradually 16 to 8 times slower) [p. 61 – 62]
- [3] Tsurukai Yûko: "Dance" (Video on Plasma Screen) [p. 72]
- [4] Christophe Charles: "Bogong Soundscapes" - "HCDC" (Headphones Pieces) [p. 61 – 62]
- [5] Eri Ujita: Documentation of the "Sounds of Weather" Event at SuperDeluxe, Tokyo, 2011
- [6] Dominic Redfern: "Drip" (Video on Plasma Screen) [p. 64 – 65]
- [7] Miyamoto Kazuyuki: "River" (Video Projection on Ceiling) [p. 69 – 70]
- [8] Shimazaki Ryûsuke: "Sounds of Weather" (Sound Projection from Ceiling) [p. 72]
- [9] Kristen Sharp & Simon Perry (Posters and Coasters) [p. 67]



6 Kristen Sharp & Simon Perry: Posters and Coasters
7 Christophe Charles: "Clover Power Plant"
8 Shimazaki Ryûsuke: "Sounds of Weather"

Artwork 4 | Exhibition

金王八幡宮、東京
Konno Hachimangû Shrine,
Tokyo

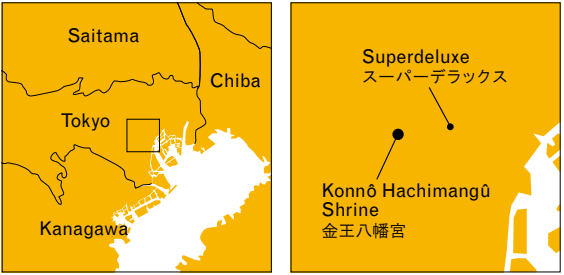
2012.10.30 – 11.3

日本では古来より、山にも軽量にも森にも動物にも神性を見出し、自らも自然の一部として生きるという姿艶が根付いた。一方、オーストラリアの原住民族は、自然によってもたらされる「天気」を、気候・天候としてだけではなく、自分たちの生活主主にもある精神的存在として捉えていた。プロジェクト「Sounds of Weather」の目的は、音情報から環境形成への気候変動の影響を調べることである。プロジェクト最後の発表となる今回は、このような私たちの暮らしを取り囲むさまざまな存在としての「天気」に耳をすませ、そこから聴こえてきた音や見えてきたものをテーマに作品展示とライブ・パフォーマンスを行った。

From ancient times Japanese people have appreciated nature through a sense of divinity that has shaped complex ways of perceiving and living with the natural environment. The indigenous people of Australia understand their environment as a physical reality underscored by a deep spiritual dimension, which informs a significant component of their dreamtime mythology. The "Sounds of Weather" project investigates ways in which weather events and conditions



1 TakemotoTakuya
2 Dominic Redfern: "Leaves"



transform urban and natural environments. We listen to and look at the weather as a presence that surrounds and immerses us, one that deeply impacts our daily lives. This concluding event presented artworks generated from different iterations of the project that spans the metropolises of Tokyo and Melbourne, and the rugged terrain of the Australian Alps and the Kimberley.



- | | |
|--------------|---------------------|
| 参加者 | Participants |
| フィリップ・サマーティス | Philip Samartzis |
| クリストフ・シャルル | Christophe Charles |
| ドミニクレッドファーン | Dominic Redfern |
| クリステン・シャープ | Kristen Sharp |
| サイモン・ペリー | Simon Perry |
| 宮本一行 | Miyamoto Kazuyuki |
| 小高沙里 | Kodaka Sari |
| 小牧葉奈 | Komaki Kanna |
| 清水裕美 | Shimizu Yumi |
| 武本拓也 | Takemoto Takuya |
| 八尋南実 | Yahiro Minami |



- 3 Kristen Sharp & Simon Perry: Photography [p. 67]
4 Shimizu Yumi: "Sushi Border" [p. 70]
5 Yahiro Minami: "Segment" [p. 71 – 72]
6,7 Miyamoto Kazuyuki: "Heap of Time" [p. 69 – 70]
8,9 Komaki Kanna: "Abendland - Morgenland" [p. 68 – 69]





10 – 12 Kodaka Sari:
“Shadows
Viewing” [p.67-68]
13 – 15 Philip Samartzis
& Christophe
Charles: Kununurra
& Bogong
Soundscapes
[p. 61 – 64]

Artwork 4 | Live Performance

2012.11.3

参加者
フィリップ・サマーティス
クリストフ・シャルル
小高沙里
小牧菜奈
武本拓也
平本瑞季

Participants
Philip Samartzis
Christophe Charles
Kodaka Sari
Komaki Kanna
Takemoto Takuya
Hiramoto Mizuki

特別出演
JOU
角田俊也
工藤文輝

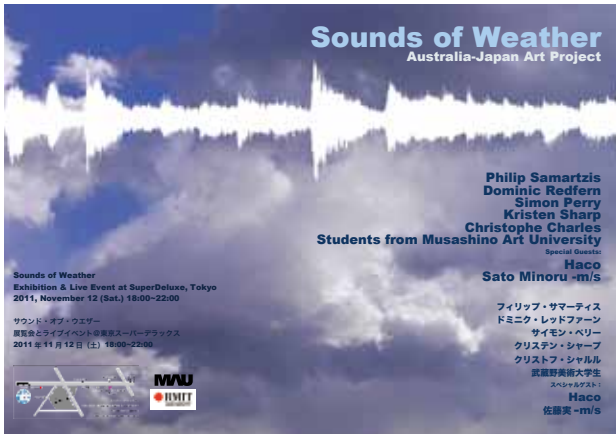
Special Guests
JOU
Tsunoda Toshiya
Kudô Taketeru

1,2 Takemoto Takuya, Hiramoto Mizuki:
“The Possibility of Dialogue: Wishes” [p. 71]





3 – 6 JOU + Philip Samartzis + Christophe Charles
7,8 Kudô Taketeru
9,10 Komaki Kanna & Kodaka Sari:
“Morgenland - Abendland” [p. 68 – 69]
11 JOU + Philip Samartzis + Christophe Charles
12 Tsunoda Toshiya



2011 Sounds of Weather -Tokyo SuperDeluxe Event Flyer
Designed by Christophe Charles



2012 Sounds of Weather / Borrowed Landscapes - RMIT Exhibition Flyer



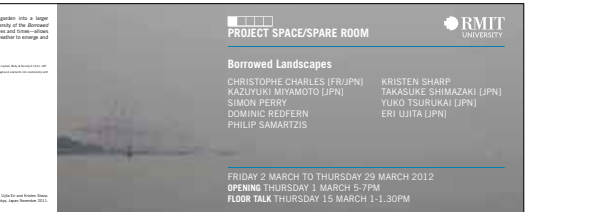
2011 Sounds of Weather -Tokyo SuperDeluxe Event 2011
Designed by Kristen Sharp and Simon Perry

2011 年、SuperDeluxe イベントのフライヤーデザイン：クリストフ・シャルル、コースターデザイン：クリステン・シャープとサイモン・ペリー。

2012 年、東京金王八幡宮での展覧会のフライヤーデザイン：小高沙里。



2012 Sounds of Weather -Tokyo Konnô Hachimangû Exhibition Flyer
Designed by Kodaka Sari



SuperDeluxe event flyer designed by Christophe Charles, coasters designed by Kristen Sharp and Simon Perry.
2012, Konnô Hachimangû exhibition flyer designed by Kodaka Sari.

クリストフ・シャルル
武蔵野美術大学教授

2012 年 3 月に、メルボルンで展示した作品について。

- ボゴン村の 2012 年 2 月の滞在中に、私はローランドの R-44 のオーディオレコーダーに AKG SE300B+CK91 のマイクと、ハイドロフォン（水中録音用マイク）を使用し、村の周辺では様々な環境音を記録した。
- 朝、昼、夕方と夜の間の数時間、私たちが滞在していたバンガローの外にマイクを置き、鳥、昆虫、風と雨の音、
- 散歩中に録音したガイ湖周辺の動物の声と水のストリームの音
- 湖のダム内部にある様々な空間で録音した演奏の音
- ボゴン村で記録した人間の生活音（木や芝を刈る人々、人間や動物の声、車やバイクのエンジン音など）、
- クローバー・ダム発電所近辺で録音した、空気中で聞こえるハム音と、地面の振動によって伝わっているハム音、
- ガイ湖とその周辺のカスケードおよびストリーム、ロッキーバレーダム湖、クローバーダム発電所の河川の中にハイドロフォンを入れた結果、水中での録音、
- ボゴンのバンガロー近辺やマツケイ山に、金属や木材を振動させる雨や風の音など。

ボゴン村の録音を使用し、2012 年 3 月にメルボルンの 3 つの作品を発表した：

- 「RMIT プロジェクトスペース」での展覧会では、展示スペースの他のインスタレーション、街路や建物（空調など）の環境音が聞こえないかたちで、ヘッドホンのみで聴くためのサウンドコンポジション（20 分・ステレオ）を提示した。内容は、サウンドカタログという形態の、ボゴン村とその近辺の、水中と水上の音である。作品制作に於ける主要なアイデアの一つは、使われている音の「時間性」を保全することである。つまり、音を編集することによってその時間性を変えることを避ける、ということである。言い換えれば、使われている音に、その音と関係のない時間性を与えることを避ける、ということである。それにもかかわらず、発電所のハム音という「ドローン」が持続しており、編集（カット）する必要がある。それたの音を比較的に「長く」聴かせているため、その「時間性」は完全に失われていないことを考える。他の重要なアイデアは、互いに妨げることなく同時に起こって様々な音が共存する、ということである。

- 同様の「RMIT プロジェクトスペース」では、ボゴン村近辺のクローバー発電所で録音した低周波数の音を使用し、音の空間性を感じさせるサウンドインスタレ

Christophe Charles
Professor of Musashino Art University

About the sound works presented in Melbourne in March 2012.

- During our stay in February 2012 in Bogong Alpine Village, I have recorded all kinds of environmental sounds in, and around the village, using two AKG SE300B+CK91 microphones and two hydrophones into a Roland R-44 audio recorder. The recordings mainly consisted in:
- 1- placing microphones outside the bungalow where we were staying, for several hours during morning, day, evening and night, and recording sounds of birds, insects, wind and rain,
- 2- taking the microphones during walks around Lake Guy to record animal life and water streams,
- 3- recording sound experiments and performances in different resonant spaces inside the dam of the lake,
- 4- recording human activities in Bogong Village (people cutting trees and lawn, driving cars and motorcycles, talking and singing, etc),
- 5- recording the hums of the Clover Dam Power Plant heard in the air and in the ground,
- 6- placing hydrophones in the waters of Lake Guy and its surrounding cascades and streams, the Rocky Valley Dam, as well as the rivers nearby the Clover Dam power plant to record underwater activities,
- 7- placing hydrophones against metal and wood material to record the effects of rain and wind on those materials, near the bungalow and on the Mount McKay.

Using the Bogong recordings, I have presented three different works in Melbourne (March 2012):

- At “RMIT Project Space”, a stereo 20-minute sound composition in the manner of a sound catalog, mixing underwater and overwater sounds was to be listened to through headphones, independently from the environmental sounds of the exhibition space (street and building sounds, sounds from other installations). As in most of my works, one of the main ideas is to preserve the temporality of each sound, that is, to leave the sounds unedited, without intending to make them fit into a different temporality. Nevertheless, the hums of the power plant are continuous and have to be cut, but as they are heard over several minutes I assume that their temporality is not totally lost. Another important idea is to have different sounds happening simultaneously without obstructing one another.

- In the same “RMIT Project Space”, a sound instal-

サウンド・ピース
Sound Pieces



ーションを制作した。部屋の対角に配置されたスピーカーから流れるのは、超低周波数が微妙に違う音である。 アルヴィンルシエ作曲の「Still and Moving Lines of Silence in Families of Hyperbolas」のように、それぞれの周波数の音が干渉することで、様々な速度の、音のパルス（または音の波紋）は生み出される。会場の環境音（外の交通音や声、建物の電気設備と空調のハム音など）と他の作品の音を同時に聴きながら、観客が空間での位置を変えることで、音の波紋を耳と体で感じるための作品であった。

3- メルボルンの「ウエストスペース」という広いギャラリーで演奏を行った。会場の環境音と、ギャラリーの玄関ホールの四隅に配置された4台のスピーカーから流れる音の反響も聴きながら、ボゴン村近辺で録音した音のライブミックスを行った。スピーカー、会場の壁、立っている・座っている・移動している視聴者、それぞれの位置によって音の反響が変化するので、その反響に注目しながら、また音同士がどのように相互に反応し合うかを聴きながら、ミックスのバランスを変え、新しい音材料を追加し、コンピュータプログラムの徐々にパラメータを変更した。作品のために用意した音をベースに、演奏しながら浮かんだアイデアによって他の音を次第に加えた。

電子的に録音された音は、電子データとして保存されている。その電子データ（サウンドファイル）を再生する時に、元の音と同じように聴こえる場合もあるが、再生された時の空間、音の波を運ぶ空気、スピーカーなどの音響装置の特性によって、聴こえ方は常に変化する。聴いている人々の聴力、その時の気分、立っている場所などによって、聴こえ方はまた変化する。特定のサウンドスケープの音は非常に複雑であり、他の音との相互作用もますます複雑になる。サウンドパフォーマンスを行う際に私の主な関心は、リアルタイムで常に予測不可能かつユニークである音の振る舞いの複雑さを体験することである。音に含まれている多くの情報を、我々は自由に認識している。ある意味、サウンドパフォーマンスの経験は、我々の日常の経験とは異ならない。が、特定のサウンドテクノロジーを使用し、特定の視聴者と一緒に特定の時空間にすることで、特別な緊張は可能になる。演奏者と観客は自分の環境に深く耳を傾け、音空間、つまり「ウエザー」（天気）の微妙な変化を目撃できるような状況である。

lation using mostly bass frequencies originating from field recordings of the Clover electric power plant near Bogong.The sound installation specifically produced for the RMIT Project Space could be experienced as a space piece, together with the environmental sounds, according to the listener's position in the room.Two loudspeakers placed in two opposite corners of the room would diffuse a set of ultra-low frequencies close to one another (as in Alvin Lucier's “Still and Moving Lines of Silence in Families of Hyperbolas”), which thus would interfere and produce audible beats (or spinning ripples of sound) of varying speed in specific places of the room.The listeners were invited to walk around and feel the beats while listening to the sound pieces by other artists together with the sounds of the environment: traffic and voices from outside, hums of the electric equipment and air conditioning of the building, etc.

3- During the live performance at “West Space”, I played, transformed and mixed the Bogong recordings while listening to their resonance in the space, and to the environmental sounds happening in real time.The performance consisted in playing a set of sounds from the Bogong recordings through speakers positioned in the four corners of the entrance hall. The sounds coming from the loudspeakers would resonate in the space according to the position of the speakers and of the walls, as well as to the position of the audience. I would then react to the resonance and modify gradually the parameters of the computer program while adding new material and listening to the way the sounds would mix and react to each other. A set of basic sounds to be used in the performance had been chosen in advance, and other sounds were added, according to new ideas that I got while listening and performing.

Electronically recorded sounds are electronic data. They keep some of the characteristics of the original sounds, but are heard differently each time they are played, because the situation where they are played is always different, according to the characteristics of the loudspeakers, of the space where they are heard, of the air which carries the sound waves, etc. People's ability to listen is also always different, according to what they focus on, to their mood, to their position in space, etc. Sounds, which are recorded from a particular soundscape, are always very complex. Therefore, their interaction with other sounds is all the more complex. My main interest in doing sound performances, is to experience in real time the complexity of the behavior of sounds, which is always unpredictable and unique, and carries lots of informa-

フィリップ・サマーティス
RMIT 芸術学部教授

自然への回帰
フィールドレコーディングには社会と自然環境の再構築と相互作用の純粋な記録に由来する豊かで多様な体系がある。造られた、もしくは自然のままの環境をレコーディングするという行為は、サウンドイベントの意義や、環境から切り話された音源を我々がリスナーとしてどのように受け取るのかという事について多くの問題を提起する。観客として我々はしばし、作曲家の意図と、フィールドレコーディングを中心とした学問領域とそれらの関係を手がかりとする。音響生態学、生物音響学、サウンドスケープ、フォノグラフィのような学問領域はフィールドレコーディストの目的達成の為の理論的土台となるのである。さらにフィールドレコーディングは、サウンドアート、即興音楽、電子音響、またフォークやロック、エレクトロニカの一節など、より広い文脈での出現が可能となる。問題は、フィールドレコーディングとそれら様々な種類の音楽とを統合する際、採取されたオリジナルの音源の何を残し既存の音楽のコンテキストにどのように翻訳するのかという事である。

フィールドレコーディングはマイクのプリズムを通じ、その場所に特定の認識を与える事ができます。カメラのズームレンズと同様に、マイクはフィールドレコーディストがある環境の非常に独特な特徴に照準を当てる事を可能にし、また一方で不適切と思われる音を削除する事も可能にする。フィールドレコーディングは、場所に対する我々の知識と認識とを拡張させる非常に希有な体験を生み出す。さらにまた別のレベルにおいてその体験は、明らかにサウンドレコーディストによる選択によって決定されている。では、録音環境の条件や危険に拠ってしまいうマイクの選択や配置、フィルター、圧縮などの選択がオリジナルの音源に影響を与えてしまう時、録音した音響をどう編集すればいいのだろうか？影響を受けないフィールドレコーディングの経験はどの程度で、作家の即興性はどの程度なのだろうか？

tion which we are free to acknowledge. In a way, the experience of a sound performance is not different from what we experience everyday everywhere, but defining a particular time to listen to those sounds through a particular sound technology, together with a particular audience, enables a very particular tension to happen, as the performer(s) and the audience are in a situation where they are invited to deeply listen to their environment and witness every transformation of the sound-space, that is, of the weather.

Philip Samartzis
RMIT School of Art, Associate Professor

Back to Nature
Field recording has a rich and diverse history that stems from pure documentation of place to reconstructed social and environmental conditions and interactions.The act of recording a natural or constructed environment raises many questions as to the significance of the sound event and how as listeners we perceive sonic events removed from their context. As listeners we are often guided by the composers intent and their relationship to the categories that field recording is organized around. Categories such as acoustic ecology, bioacoustics, soundscape, and phonography provide a philosophical underpinning to the aims and ambitions of the field recordist, yet field recordings can appear in much broader contexts including sound art, improvisation, electroacoustic composition and various strains of folk, rock and electronica.The question that emerges from the integration of field recording across various musical practices is what remains of the original recording and how do we interpret it within the given context?

Field recording can provide a particular insight into a location through the prism of the microphone. Similar to a zoom lens of a camera, the microphone enables the field recordist to focus on very specific features of an environment while canceling out other sounds deemed irrelevant to the task at hand. On one level field recording can provide a very specific experience that can extend our knowledge and appreciation of a location, yet on another level the choices made by the sound recordist clearly determines the experience. How then do we interpret a recording when choices around microphone selection and placement, filters and compression, combined with environmental conditions and hazards affect the integrity of the original sound event? How much of our experience of

フィールドレコーディング
Field Recording



フィールドレコーディングは、レコーディストが場所に素早く順応すれば自発的な行為と成り得る。これにより、マイクの前で発生し消えゆく束の間の儚い音を捉えるという驚くべき成果を得る事が出来る。しかしまた場所の事前知識は、それぞれの場所の状況は日や季節ごとに変わる音と空間のサイクルに拠る為、このような即興的な瞬間を記録するのに役立ちます。このような出来事を記録する為に、レコーディストはマイクの選択、マイクと音との距離、場を形成する音響効果の種類、その場の他の音、最も録音に適した時間帯、一日の中でどのように音に変化していくか、などの要素に関する多くの疑問を熟慮している。移り変わるこれらの作用の観察は、無秩序な騒音に隠された場の微妙なニュアンスを明らかにするレコーディングを造り出す事を可能にする。

Sounds of Weather ではそれぞれ遠く隔たった、しかし明らかにある特殊な環境的性格が共通する様々な場所を調査した。それぞれの場所を形作る環境的狀態一熱、雨、冷気、風―は人がその場所を歩き、体験する為に最も重要なものである。では、Sounds of Weather を構成する仕事は体験されたり問われたりするものだろうか？もちろんその両方をする事は可能である。しかし音楽的な楽曲とは異なり、フィールドレコーディングは捉えられた音と空間がレコーディストの価値観や記憶、知覚に風を起こす時、それ事態が問いかけにまでなる。また同じく、見過ごされがちな聴覚環境の重要性を自覚させる / あるいはそれを啓発するという責務を、我々個人と共同体の両方に対して、フィールドレコーディングは負っているのではないだろうか。一人のアーティストとして、また一人の観客として、各人が音響体験の奥深さを判断するという複雑な問題にどのように取り組むめばよいのだろうか。

ドミニク・レッドファーン
 RMIT 芸術学部准教授

東京スーパーデラックスでの「サウンド・オブ・ウェザー」イベントのために、私は日本のありふれた風景である紅葉の「ライブビデオスキャン」を作成した。2週間にわたり、東京の様々なところを散策し、落ち葉を収集

a field recording is unaffected and how much of it is the imprint of the auteur?

Field recording can be a spontaneous action if the recordist adapts to the conditions of a location quickly. This can yield surprising results in which fleeting and ephemeral sounds appear and vanish in front of the microphone. Prior knowledge of a location, however, often helps in the documentation of these impromptu moments as each location is determined by a recurring set of sonic and spatial dynamics that modulate throughout the day or season. In order to document these events the recordist usually considers many questions related to microphone selection, the proximity between microphone and sound event, the type of acoustics that inform the site, what other sounds occur in the location, the best time of day to record the sound, how the sound changes over the course of the day, etc. Observing these dynamics over a period of time enables the recordist to produce recordings that reveal the nuances comprising a location that are often hidden amongst an omnidirectional din.

The Sounds of Weather investigates several locations remote from each other but with certain spatial and environmental characteristics that connect them. The environmental conditions informing each location - heat, rain, cold, wind - are central to the way one navigates and experiences these localities. So are the works comprising The Sounds of Weather something to be experienced or something to be questioned? Of course one can do both but unlike a musical composition, field recording opens itself up to interrogation as the captured sounds and spaces provide a window to the recordist's personal preoccupations, memories, and subjective perceptions. Equally field recording seems to carry with it a responsibility to educate and/or raise awareness both individual and collective of the importance of our often-overlooked auditory environment. How one grapples with these complex issues as an artist and as a listener determines the depth of experience one has of their aural environment.

Dominic Redfern
 RMIT School of Art, Associate Professor

For the Sounds of Weather event at SuperDeluxe I created a live video scan of endemic Japanese autumn leaves. These were collected during the various walks I took during the preceding two weeks in Tokyo.

**「葉」
Leaves**



した。これは植物の葉に放射能が濃縮されることが予想されうることから生まれたアイディアである。紅葉の落ち葉を扱うことにより、2011 年に起きた日本の非常事態による諸問題についての特別な話し合いのきっかけにしようとした。日本は四季が非常に明確に現れる地で、紅葉した落ち葉は詩と哀愁を映し、また情報通信技術の歴史、現代の時間をあらわすように見えた。撮影時には、科学者のまなざしと芸術家の手によるという意識で、時には滑らかに時には急に止まるなどし、技術的には高倍率で落ち葉を撮影、スキャンした。この作品は、その後Haco とフィリップ・サーマティスによって曲がつけれ、東京展に出品されている。

メルボルン RMIT Project Space での「借景 (Borrowed Landscapes)」展のために、秋葉原にある噴水を撮影し、画像を使った。その場に居合わせた警備員によって去るように言われる前に、私は噴水から流れ出る滴の一連の写真を撮影した。私は展示会のために、水が地質学の変化に果たした役割と位置づけし、そして黒と白の抽象的な明暗法の両方のイメージを使用した。

サイモン・ペリー
 RMIT 芸術学部教授

聴衆に対し許可された者がメッセージを送れるという規則と戯れる、というアイデアとして天気予報という構想は興味深い。とはいえこれは壮大な演劇の教訓的な意図を彷彿とさせるものでもある。パフォーマンスは徐々に感覚的な過負荷の点上に構築するために設計され、科学と神話、自然と文化、制御とカオス、そして悲劇と喜劇というバイナリテーマに並置される。壊滅的な気象現象の概念は、明示的ではないものの、昨今の日本の人々や福島への街への津波とその壊滅的な影響のアナロジーとして用いられた。

このパフォーマンス物語は、若いテレビのニュースレポーターの日常を通して表現されています。彼の報告する変わり映えのしないパターン化した日常は、やがてそのパフォーマンスが進むにつれ予測不可能に、そして分裂し、やがて世界の崩壊へとシフトしていく。彼は中継が進展していくごとに、なんとか報道の規則に則ろうと態勢を整えようと試みるが、行動はますます乱れ非科学的なものへと移り変わって行く。

このライブパフォーマンスの背景では、映像のライブ配信とリアルタイムなサウンド組成、そしてオーディエン

I decided upon this strategy as a means of speaking directly to the Japanese context in that particular moment, 2011, as leaves were considered one of the places where radioactivity was concentrated. Japan of course is a land that is highly attuned to the seasons and the decaying leaves seemed to speak to its history, and contemporary moment, with a degree of poetry and pathos. I scanned the leaves at increasing degrees of magnification with a sometimes smooth, sometimes abrupt, set of gestures that were somewhere between a scientific examination and an artist's hand. This piece was subsequently scored by Haco and Phil Samartzis and exhibited as an installation for the Tokyo exhibition.

For our Borrowed Landscapes exhibition in Melbourne I used a single image, shot at a fountain in Akihabara. Before I was told to leave by security guards I was able to shoot a series of images of trickling drops, which were drawing the calcium from the basalt fountain. The image I used for the exhibition functioned both as an image of that site and of waters geologically transformative role but also as an abstract chiaroscuro play of black and white.

Simon Perry
 RMIT School of Art, Senior Lecturer

The idea of a weather report was interesting as it provided a popular format that was internationally recognizable and allowed participants to play with the conventions of addressing an audience and delivering a message. In this way it was reminiscent of the didactic intentions of epic theatre. The performance was designed to gradually build to a point of sensory overload and juxtaposed binary themes of science and mythology, nature and culture, control and chaos, and tragedy and comedy. The concept of a catastrophic weather event, although not explicit, was used as an analogy for the recent Tsunami and its devastating effects on the people of Japan and the city of Fukushima.

The narrative arc of the performance took the form of what starts out as a conventional day in the life of a young TV news reporter. As the performance progresses, the predictable every day patterns he is used to reporting on, shift into a world of unpredictability, fragmentation, and destruction. His attempts at maintaining control and adhering to the rules of news reportage gradually breakdown as events unfold: his



**ウェザーマン
The Weather Man**



スに囲まれた演者が操作する小道具によって作成された地図や大洪水、河川の氾濫およびそれらに関する画像がコラージュされたものが壁に投影され、まるで混沌と化した、収集がつかぬ現場の様相を制御しようとする様が見られる。

わたしにとって成功した作品には後遺症といえるいくつかの点がある。それはまるで地下水面のように、目視できず、静かでいて感情や言葉では表現できない感情なのである。

参加者：
サイモン・ペリー（パフォーマンス）、ドミニク・レッドファーン（映像）、クリストフ・シャルル（音響）、島崎隆輔（パフォーマンス、声）。

クリステン・シャープ

スタジオコーディネーター、 RMIT 芸術学部

クリスタルセット

クリスタルセットは声、音、ライブパフォーマンスを組み合わせた作品である。元々埼玉の地下放水路で録音されたこの作品は、HACO や宇治田枝里の声、そしてクリストフ・シャルルとフィリップ・サマーティスによる録音を特徴としている（この録音にはウェストスペースのパフォーマーの鶴飼祐子と島崎隆輔、スーパーデラックスの山名知世が協力している）。クリステン・シャープはアーティストと協力しながらこの作品を制作した。

この作品は日本語においてオノマトペ（これは音を表すことばを意味する）がいかに多用されているかに基づいている。この中でアーティストは、例えば様々な雨の種類や水の効果音など日常生活の会話において天気的事象を表す音やことばを取り扱っている。それぞれのアーティストは地域の口語的表現に基づいた上で、自身の解釈を作品へと投入している。この独創的な録音は圧倒的なスケールや、埼玉の貯水槽における広大な空間と人間の声との共鳴を取り扱うものとして生み出された。この録音は、オノマトペの韻律をとおして、空間と音響の関係性を調査したものである。

behavior becomes increasingly unpredictable, and his language moves from the objective and scientific to the subjective and mythological.

Behind this live performance, a montage of images relating to mapping, deluge, flooding, and the break-down of communications, was projected on the wall. These images were seen in conjunction with an improvised video delivery and sound composition and a series of props manipulated by performers located amongst the audience, creating an overall effect of control giving way to chaos and a shift away from a collective experience towards one of isolation.

For me, the success of the work is in some ways an after-effect. Like a water table beneath the surface, unseen, silent, and with a weight of emotion and meaning that is both indescribable and unspeakable.

Participants:
Simon Perry (performance), Dominic Redfern (performance, video), Christophe Charles (sound), Shimazaki Ryūsuke (performance, voice).

Kristen Sharp

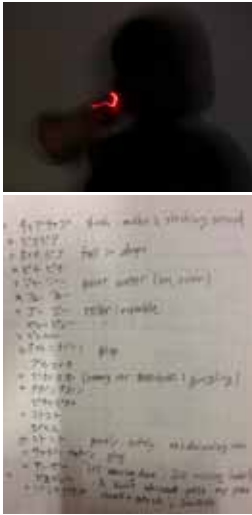
Studio Coordinator, RMIT School of Art

The Crystal Set

The Crystal Set is a collaborative work involving voice, sound and live performance. Originally recorded in the Underground Water Channel in Saitama, the work features the voices of Haco and Ujita Eri and sound recordings by Christophe Charles and Philip Samartzis (accompanied by performers Tsurukai Yûko, Shimazaki Ryūsuke at West Space, and Yamana Tomoyo at SuperDeluxe). Kristen Sharp composed the work in collaboration with the artists.

The work is based on the predominance of onomatopoeia (words that represent sounds) in Japanese language. In this work, artists responded to sounds/ words for weather events in everyday speech, including different types of rain and water effects. Each artist brings their own interpretation to the work, based on local colloquialisms. The original recording was created as a response to the surreal scale and juxtaposition of the human voice with the colossal space of the Saitama Water Storage tanks. The recording explored spatial and acoustic relationships through the rhythm of onomatopoeia.

クリスタルセット The Crystal Set



サイモン・ペリー、クリステン・シャープ

写真の大きな水たまりは、その場所やフィールドワークの単なる資料ではなく、天気や環境、文化的地形との遭遇や経験に対する反応である。

天気が長い年月をかけて物質に与える影響、空間の物質性（隅田川、東京湾、埼玉首都圏外郭放水路、ボゴン高山地帯）、そして人的活動と自然環境における対比、これらのイメージを通して一連のテーマが浮かび上がってきた。これらは全て水がどのように操作され、どのような影響を及ぼし、どれだけ日常生活の一部であり、どのように社会と連動しているかという、水の類型学である。調査中の空間は、その規模や、どのように天気と遭遇し形作られたかという点において桁外れである。例えば、霧深い日に、空と陸が霞んだ中で交わる東京湾の繋ぎ目が見えるか見えないかぐらいの形態がそうである。

写真自体は空間を切り取った時間の中の一瞬である。全てのものが新しく、奇妙で、異国情緒に溢れて映る旅人の目や、体験の出現を記録、収集、貯蔵したいという願望に反響してイメージは現れる。このイメージが真っ直ぐなドキュメンタリーなのか、或いは一般的な旅人のスナップショットなのかを見分けるものは、見慣れたものを不慣れなものにしたり、場所の乱雑さに魅力を感じるという、型にはまらないアプローチを追求する願望である。この過程には、空間を美学のある形にするか、背景にある意味を曖昧にするかの間にいつも緊張がある。

小高沙里

光というものは大抵「明るさ」として認識される。確かに存在はしているけれど、なにかを依代としたときに初めてその姿を目視することができる。カメラ・オブスキュラは映像の原点となった光学装置で、光を纏った被写体を、レンズを通してスクリーン上に像として映し出すものだが、この像は写真のように定着したものではなく「光」そのものであり、その明瞭度は被写体の光量やスクリーンの明度に大きく左右される。例えば太陽光で十分明るい部屋で蛍光灯をつけてもわからないのと同じように、スクリーンに光が当たると像が打ち消されてしまうのだ。そのため、カメラ・オブスキュラは通常スクリーンが暗くなるような構造をとるが、今回はスクリーンの前にレ

Simon Perry & Kristen Sharp

The large pool of photos are more than just documents of sites and fieldwork, they are responses to encounters and experiences of weather, environment and cultural topographies.

A series of themes has emerged through these images: the effects of weather over time on material forms, the materiality of spaces (Sumida River, Tokyo Bay, Saitama Underground and Bogong Alpine Region) and the contrast between human activity and the natural environment. They are all typologies of water – how it is controlled, how forces impact on it, how it is part of everyday life and how societies work with it. The spaces under investigation are extraordinary – by their scale and how they are encountered and shaped by the weather. For example, a foggy day on Tokyo Bay where the sky meets the land in a hazy, liminal form of connection.

The photos themselves are moments in time, captured spaces. The images appear to echo the eyes of the tourist – where everything is new, strange or exotic, and the desire to record, to collect and to preserve experience emerge. What distinguishes these images from straight documentary or typical tourist snapshots is a desire to seek out unconventional approaches – to make the familiar strange or being drawn to the messiness of sites. In this process, there is always tension in reducing a space to an aesthetic form and obfuscating the meaning behind it.

Kodaka Sari

Light is usually recognized as “brightness”. Light certainly exists, but we are able to see it only when something is lit up, and thus it becomes a filter to a way of seeing.

The camera obscura is an optical device that is the origin of contemporary moving and still images (film and photography). It reflects an object onto a screen through a lens using projected light. This figure-object is not fixed like it would be on a photograph, instead it is pure “light”. The clarity of the image is dependent on the brightness of the available light on the object and the brightness of the light projecting on the screen. Just as we would not notice the light

写真 Photography



影見 Shadows Viewing



ンズがぶら下がっているだけの、カメラ・オブスキュラとしては非常に都合が悪い構造をとった。その結果、曇りでは被写体の光量が足りずほとんど像が見えず、逆に晴れでも太陽の位置によってはスクリーンが明るくなりすぎてしまうなど、大きく空模様の影響を受けて変化する作品となった。天気や太陽位置によって刻一刻と変化してゆき、中々思い通りにはならない光の姿をこの依代を通して見つめたとき、天気がもたらす光の影響を改めて認識させられ、それに抗ったり適応したりしてきた人間の営みを感じずにはいられなかった。

小牧 葉奈

以前から傘はアンテナのように見えるなと思っていた。現代を生きる私たちには、美味しい食物と毒のある食物をかぎわけたり、遠くの音をきいて身の危険を予知したりする必要など、まずない。暑ければ冷房を、寒ければ暖房をつけて、暗ければ灯りをともせば快適に過ごすことができる。そんな今、私たちが日常の中で五感をひらめかせる機会というのは、天気をよむときなのではないかと思った。空の色がかげってくるのを見て、鳥の声をきき、大気の湿気を匂いや肌で感じとる。いよいよ雨や雪が降れば、傘をさし、濡れまいと急ぎ足で歩く。傘はそんな人々が頭上にかざしたパラボラアンテナのように見えた。

そもそも傘は嗜好品として長く愛されてきた。ヨーロッパでは遺言書に自身の傘を譲り渡す相手の名を記すことも少なくなかったという。安いビニール傘の普及した現在でも、高級傘は愛好家のなかで絶えることなく人気を博している。また、日本舞踊では小道具として踊り手に寄り添って独特の美しさをみせるし、伝統芸能として傘踊り（笠踊り）が行われる地方もある。古くから仏教の八吉祥（魔を除け、幸運をもたらすと言われる八つのもの）のひとつとしても数えられてきた。さらに、相合傘の言葉もあるように、同じ傘の下に寄り添う男女の仲は睦まじいものとされる。傘は、悪しき影響から人々を守り平安をもたらすものの象徴なのである。

of a fluorescent lamp in a bright room with a lot of sunlight, the image of the figure will disappear when too much light hits the screen. In the work I have exhibited at the Konnô Hachimangû Shrine, a series of lenses hang in front of a screen. As a camera obscura it is structurally inconvenient because the image can hardly be seen on the shôji paper (the screen). When it is cloudy the light on the object (the garden) is not strong enough, and when it is sunny, depending on the position of the sun, then it is often too bright. On the other hand, it became a work that changes dramatically under the influence of the weather. Everything transforms from moment to moment depending on the weather and the position of the sun. When we are looking through a filter, we witness the form of light. This echoes the activity of people trying to adapt or to resist light and weather effects.



Komaki Kanna

Nowadays, most of us don't need to worry about the weather; when it is dark we turn the light on, when we are cold or hot we turn the air conditioning on. In such a situation it seems to me that reading the weather becomes one of the rare opportunities to open our senses, such as looking at the darkening color of the sky, listening to the voice of the birds, or smelling and feeling the moisture of the atmosphere with our skin. The relationship to nature in Eastern and Western cultures seems very different. The West tries to control nature, whereas the East thinks of nature as an entity that is worthy of respect and fear, and something coexists with humanity. The same can be said about the physical relations between human beings. The West tends to orientate its antenna toward the outer, whereas in the East our antennas are directed towards the inner, for introspection.

In my work "Abendland · Morgenland", I am using the multi-faceted motif of the umbrella to depict a different mobility in the West and the East, and to explore relationships with the weather. When it is raining or snowing, people open an umbrella and walk a little faster. The umbrella looks like a parabolic antenna over their head. On a rainy day, people will get of their house carrying an umbrella, protecting themselves from the cold rain with a small antenna overhead, to pursue their way

Many umbrellas have sixteen bones – a form that is

Abendland · Morgenland 一夜の国と朝の国 Land of Night - Land of Morning



ところで、西洋と東洋の自然観はおおきく異なるものだ。西洋が自然を手懐けて人間の支配下におこうとしたならば、東洋では敬うべき対象として畏れられ、共存してきた。これは人間と自然 (nature) との関係だけではなく、人間と人間自身の身体の関係においても同じことが言える。西洋が外へ外へとアンテナを向けているとすれば、東洋では内へ向かう、内観するはたらきが重要視されてきたのである。

今作「Abendland · Morgenland 一夜の国と朝の国」では、傘というモチーフのもつその多角的なイメージを用いて、西洋と東洋での異なる運動性を描いている。多くの洋傘は十六本の骨をもつが、これは上から見れば十六方位のコンパスを想起させるかたちである。また、閉じれば縦長、開けば横長の円錐形にみえるシルエットは、方向を示す矢印記号（「→」「↑」）にもみえる。それぞれ異なる自律的な回転運動によってもたらされる影のかたちの変化は、日時計のように規則的であり、ゆるやかな時間と空間の変容を作品にあたえている。ある種のミニチュアのような様相でありながらも、微視的な運動だけでなくどこか巨視的なスケールをも捉えようとしているのだ。

一説によると、傘の起源は四千年もの昔だという。これから何千年が経っても、きっと朝と夜は巡っているだろう。そして雨の日にはやはり、人々は傘を携えて家を出るのだろう。頭上に小さなアンテナをはりめぐらせ、つめたい雨から身をまもって、それぞれの道を往くために。

宮本一行

『日常生活の中で無意識に聴き流している環境音に耳を傾ける』ということコンセプトとして、日濠でのフィールドレコーディングと演奏を行いました。レコーディングの際、特に注意していたことは音の聴き方と捉え方。人が入る事の出来ない狭い空間などのさやかな音響を力強く感じさせるため、モチーフとして昆虫などの小さな生物が感じている音環境をイメージしながら、レコーダーを人の届かないところに設置したり微動させたりしました。演奏では、レコーディングした環境音を組み合わせで伴奏部分を、トロンボーンで旋律部分を表現した。ここで言う旋律部分というのは、人の目線で聴こえてくる環境音のことです。特に今回のレコーディングの中で私自身が感じた環境音の音階や音域から即興的に演奏しました。普段聴き慣れていない環境音を具体的に、聴き慣れている環境音を抽象的に表現する事で、その場所に置ける一

reminiscent of the sixteen directions of a compass. Also, it looks like a vertical silhouette when closed and a conical silhouette when open. The shape of the shadows cast by umbrellas changed according to their rotational motion, which suggests a gradual transformation of time and space, with the regularity of a sundial. Despite their miniature aspect, they can be imagined on a macroscopic scale.

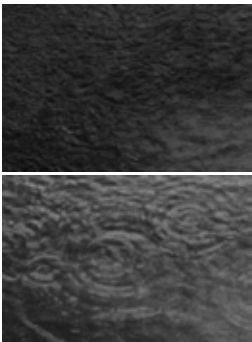
It is said that the umbrella is 4,000 years old. While seemingly common, umbrellas have been loved as luxury goods. In Europe for instance, it was common to nominate in a will and testament who would be the recipient of one's special umbrella. Even today when cheap plastic umbrella are popular, luxury umbrellas have gained in popularity. The umbrella is sometimes used as an accessory in Japanese traditional dance (Nihon buyô). There are also local dance festivals where an "Umbrella Dance" ("Kasa odori") is performed as a traditional art. There is also a particular word in Japanese "aigokasa" ("sharing an umbrella"), referring to men and women who walk close under the same umbrella are said to have a harmonious relation. Thus, the umbrella becomes a symbol of peace and protects people from evil influence.



Miyamoto Kazuyuki

In Japan and Australia I made recordings of soundscapes where I played trombone with the idea of listening consciously to the flow of environmental sounds, which we usually listen unconsciously in daily life. I paid particularly attention to how I listen and perceive sound during the recording process. In order to feel and hear strongly small sounds, for example the ones occurring in places where humans are too big to enter, I was very careful to place the audio recorder where people could not interfere with it and to avoid making too much movement near the recorder. My intention for the work was to recreate the sound environment that small organisms such as insects would be listening to. During the performances, I would combine recorded environmental sounds as an accompaniment for the melodic part played by the trombone. This melodic

Heap of Time



つの環境音楽を提示出来たのではないかと考えます。

作品「Heap of Time」について

762 枚の写真を徐々に重ねていく事によって作り出した映像作品です。本来「場」が持っている時間軸を写真に収める事で一度その場の時間軸から切り離し、それを再構築する事によって、新しい視点から環境の変化を見ることを目的としています。

またその映像に対しての音楽は、撮影場所で聴こえてきた様々な音をもとに作曲したものです。写真撮影中の環境音を録音したものを一度音階や和音に整理をして、写真が表示される時間に対応するように音の流れを再構築しました。

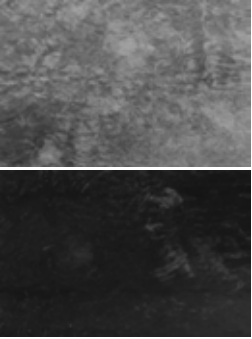
映像と音楽、この再構築された二つの媒体を統合するために被写体である自然環境の現象（環境フェノメナ）をテーマとして編集を施しました。

この作品を通じて自然環境が本来持っている癒しや恵みなどの優しい部分と天災などの恐ろしい部分、その両端の力強さを感じ取ってほしいです。

part consists of the environmental sounds that are visible to the human eye. In the recording, I improvised my playing in response to the scales and range I experienced when listening to the environmental sounds. I believe that I was able to present a kind of site-specific environmental music by expressing concretely environmental sounds we are not used to listening to and abstracting environmental sounds that we are used to.

“Heap of Time”

This video installation work is created from 762 photos, which are gradually repeated. The photographs were organized according to a new time axis, different from the time and the place where I took them. I reconstructed a new time axis in the video work to perceive environmental changes from a new perspective. The music for this piece is composed from various sounds which I heard on location. I reorganized these environmental sounds according to scales and chords. The flow of sound was then reconstructed in the composition to correspond to the timing of the photographs in the video. During the process of editing, I considered the phenomena of the natural environment and how these related to the integration of two media (video and music) that I had reconstructed. Through this work I hope that the viewers will feel two extremes: the friendly side of the natural environment, such as healing and grace, as well as the terrible strength of natural disasters.



清水裕美

私はお寿司が好きです。お寿司を食べる前に写真を撮り、携帯電話のスクリーンセーバーに使います。自分の携帯電話を開くたびに、その写真を楽しんでいます。お寿司を食べるたびに新しい写真を撮り、画像を更新します。その行為を繰り返すことで、食品としてのお寿司に夢中になっており、そして寿司の生々しさの視覚的な関心を表すことになります。

お寿司はプレート上に一列に配置されたときにおもちゃのように見えます。一列に並んでいるとき、その「ポップ」的外観と若々しい美しさが好きです。また、その脆弱に感服します。このような魅力を感じて、私は「寿司ボーダー」という作品を作り始めました。

Shimizu Yumi

I like sushi. I like to take photographs of sushi before I eat them and use the pictures on my mobile phone screen saver. Every time I open my phone, I enjoy the image that I see. I take a new picture when I eat the next sushi and update the image. By repeating these actions, I express my dumb love for sushi as food, and my visual interest for the rawness of the sushi.

They look like toys when they are placed in a line on a plate. When they are in line, I like their “pop” look and their youthful beauty, I can also feel their fragility and therefore I feel admiration for them. With such a fascination I started making this work: “Sushi Border”.

寿司ボーダー Sushi Border



武本拓也

「対話の可能性#おねがいごと」

気象環境は常に変化していきます。お天気のはなしばかりではありません。今いる部屋の中でも、自分の吐く息、発する声、動作、部屋の掃除具合、友達の来訪、全然意識の無いお隣さんの動向に至まで、あらゆるものに影響されて刻一刻と変化していきます。天気は天気予報で知らされたり空を見上げて観測されたりする自然現象ですが、同時に私たちも天気 / 環境の要素の一つです。

話し合いの場は、そんな気象環境のようです。自分自身の参与・不参与によって場の空気は常に変化し、全員が構成物 / 出演者で、同時に観客です。人間の活動が気象に深刻な影響を与えたり与えられたりするように、観客は無関係な立場からパフォーマンスを鑑賞する事はできません。

観客はまず輪の形に座り直します。パフォーマーは「自分の欲望」についての告白した後、観客にも「自分の欲望」について聴いていきます。観客一人一人が持つ「おねがいごと」が、その場をどのように形成し変化させていくのか。また、パフォーマンスの観る / 観られるの関係を如何にすれば破壊する事が出来るのか。という様な事を考えた実験作です。

Takemoto Takuya

“The possibility of dialogue: Wishes”

The meteorological environment changes constantly over time. It is not just the weather that transforms. Even when I sit in my room my breath, my voice, my activities, friends who visit me, and neighbors whom I don't know are influencing everything; everything changes from moment to moment.

The weather is a natural phenomenon we can observe it, we are informed about it by forecasts, but at the same we are part of it. A discussion resembles weather. The atmosphere is constantly changing due to one's participation or non-participation. In this sense, everyone is an actor, involved in life, and everyone is the audience. As human activities seriously influence, or are affected by the weather, the audience will not be able to watch the performance without having a relationship to the environment in which it takes place.

During the performance at the Konnō Hachimangū Shrine, the audiences sat in the form of a ring and were invited to participate in a discussion. After the confession of one performer about their desires, I asked people in the audience about their “desire” as well. Each person in the audience had a “wish”. Talking about this “wish” caused changes in the situation, and invited new responses by other participants. It was an experimental work exploring how we can reconsider the relationship between seeing and being seen, participating and not participating, which is inherent to such a performance.

対話の可能性 #おねがいごと

The Possibility of Dialogue: Wishes



八尋南実

何事においても位置関係は大切である。距離感が、立ち位置が、たった数行が、肝心なのである。天を見上げる度に思うのは、私が世界を形作っているのか、世界が私に作られているのか、という疑問だ。また、我々はたえず自由を求めながらも、一方で自身の存在の不確定さを恐れ、世界からの拘束や線分による自身の位置設定を欲求する。我々はその疑問と矛盾の間に揺れ続ける。もし天に目があるとすれば、その様子はいじらしくも、またとても愛らしくもあるだろう。しかし非人称の視点とは我々が意識した瞬間存在しない。あえていうならばそれは、生気のない死体めいたものにしか宿らないのだ。

Yahiro Minami

Positional relationship is important in any situation. Sense of distance, standing position. Even a few lines are vital. Every time I am looking up at the sky, I question whether I am making the world, or whether the world is making me. While we are constantly seeking freedom, we fear the uncertainty of our existence and try to define our own position through segmentation and restriction. We are swaying between doubt and contradiction. If heaven had eyes, its appearance would be touching and lovable.

生気の無い目 An Eye Without Life - Segment



However, an impersonal perspective does not exist once we become conscious of it. It can only dwell in a body without life.



鶴飼佑子

雨が降ったりすると、最低でもう何もかも嫌になる。晴れてると、気分は最高で、なんでもできちゃうような気分になる。そんな気持ちのリズムについて考えながら、東京でのパフォーマンスに参加しました。

ところ変わって、オーストラリアに滞在する中で、15年続いた干ばつのこと、大事に守られている山頂から湖／川／街／その川が繋がる海へと水のサイクルを目にしたこと、水道水がおいしいということが、天気に対する気持ちを変えたように思います。少しの雨ならば、少し急ぎ足でも楽しいと思えたのです。あの山頂近くの澄んだ湖から流れている水を飲んでる彼らのカラダの中では、あの水が楽しく踊っているのだと思うといい気分でした。

島崎隆輔

東京を流れる水の音と、オーストラリアの水辺の環境音を録音し再構成しました。

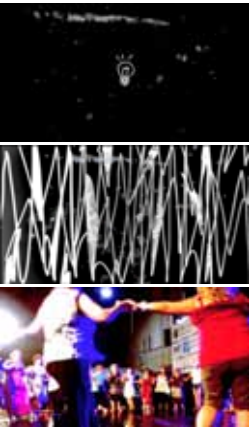
Tsurukai Yûko

For the “Sounds of Weather” exhibition, I made a video work exploring the drought problems in Australia and the opposite situation of the abundance of water in Japan. The work expressed the feelings of water dancing inside my body. When I visited the Australian Alps, I could feel the cycle of water, which links the top of the mountain to the lakes, the rivers, the cities, and again the rivers to the sea. This cycle has been carefully protected for many years. The water which people drink in the Australian Alps comes from the top of the mountain, it dances happily in their body and tastes delicious, and that feeling made me feel well. Usually when it rains I'm at my worst and sick of everything, and when it is sunny my mood is at its best, and I feel like I can do anything. The rain in Australia made me change my feelings about the weather: a little rain made me walk a little faster, but it was fun. Thinking about the rhythm of such feelings, I took part in the “Sounds of Weather” project.

Shimazaki Ryûsuke

I recorded the sound of water flowing through Tokyo and the environmental sound of the Australian water-side, and reconstituted it.

ダンス Dance



サウンド・オブ・ウェザー Sounds of Weather



クリストフ・シャルル Christophe Charles

1964年マルセーユ（フランス）生まれ。筑波大学大学院芸術学研究科博士課程修了、デザイン学博士。フランス国立東洋文化東洋言語研究所大学院博士課程修了、文学博士。武蔵野美術大学造形学部映像学科教授（2000年着任）。専門分野：メディアアート、サウンドアート。現代芸術における理論的・歴史的な研究を行いながら、内外空間を問わずインスタレーション及びコンサートを行い、それぞれの要素のバランス、独立性及び相互浸透を追求している。CD作品をMille Plateaux, Subrosa, Murmurレーベルなどでリリース。パブリックアート：大阪市住まい情報センターモニュメント（山口勝弘監修）音響担当、東京成田国際空港第一ターミナル中央アトリウム常設サウンドインスタレーション。山口勝弘、山本圭吾、風倉匠、Henning Christiansen, oval, 石川ふくろう、稲田光造、Boris Hegenbart、ホナガヨーコ等とのコラボレーション多数。
http://home.att.ne.jp/grape/charles/

Christophe Charles (born Marseille 1964), works with found sounds, and makes compositions using computer programs, insisting on the autonomy of each sound and the absence of hierarchical structure. Graduated from Tsukuba University (Phd., 1996) and Paris INALCO (Phd., 1997). Currently Professor at Musashino Art University (Tokyo), he has released music on Mille Plateaux, Ritornell, Subrosa, Code, Cirque, Cross, X-tract, CCI, ICC, Murmur, etc. Group exhibitions : Tokyo ICC (“Sound Art”), London V&A (“Radical Fashion”), Melbourne RMIT (“TheTorus”), etc. Permanent sound installations at Osaka Museum of Housing and Living (from 1999), Narita International Airport Central Atrium (from 2000). Collaborations with musicians (Henning Christiansen, Shiomi Mieko, Chino Shûichi, Markus Popp, Hanno Yoshihiro/hoon, Kako Yûzô, Shibuya Keiichirô, Numb, Boris Hegenbart, Shibata Satôko), visual artists

(Yamaguchi Katsuhiko, Yamamoto Keigo, Visual Brains, Osaka Takurô, Kai Syng Tan), and performers (Ishii Mitsutaka, Kazakura Shô, Osanai Mari, Ishikawa Fukurow, Salvanilla, Jou, Honaga Yôko, et.al.).
http://home.att.ne.jp/grape/charles/



フィリップ・サマーティス Philip Samartzis

メルボルン生まれ育ちのサウンドアーティスト。カルティエ現代美術財団（パリ、2001年）、アンディ・ウオーホル美術館（ピッツバーグ、2002年）、森アーツセンター、（東京、2003年）、台湾国立美術館（台中、2007年）、ナショナル・アートセンター（モスクワ、2009）、南アフリカ国立美術館（ケプタウン、2010年）、南オーストラリア美術館（2012年）、ビクトリア・ナショナル・ギャラリー（2013年）などでプレゼンテーションや作品発表を行い続けてきた。2010年に、東南極のデービス・ステーション、マッコリー島に於いて、「極端な気候が人間へおよぼす影響の記録活動及び研究」のために、オーストラリア南極局芸術奨励金を授与した。このフィールドワークの成果を様々な場所で発表した：「オーストラリア南極探検百周年記念展」（オーストラリア国立公文書館、2011年）、「南極のアート」展、(Muntref 博物館、トレス・デ・フェブレール国立大学、ブエノスアイレス、2011年)、第11回南極地球科学に関する国際シンポジウム（エジンバラ、2011年）。2010年に、遠隔地のコミュニティに影響を与える社会的・環境的条件を文書化するために、「トウラの遠隔地域の研修プログラム」を通じて、西オーストラリア州のキンバリー地域の先住民の集落で、3年間の研究を行った。その成果を「Totally Huge New Music Festival」（パース、2011年）と「IASKA Spaced Biennial」（フリーマントルアートセンター、2012）で発表した。RMIT 大学でサウンド研究のコーディネーター／准教授に勤める。サウンドアート、音の文化、音響生態学およびスペース・サウンド・プラクティスの分野で研究しており、「健康と福祉のための音響設計」（2008/10）、「スペース

ャル・ダイアローグ ～ 空間の対話：公共アートと気候変動」（2011/13）という2つオーストラリア研究評議会資金によるプロジェクト主査に勤めている。

Philip Samartzis is a Melbourne sound artist who has performed and exhibited widely including presentations atThe Cartier Foundation for Contemporary Art, Paris (2001);The Andy Warhol Museum, Pittsburgh (2002);The Mori Arts Centre, Tokyo (2003);The National Taiwan Museum of Fine Arts,Taichung (2007);The National Center for Contemporary Art, Moscow (2009);The South African National Museum, Cape Town (2010);The Art Gallery of South Australia (2012); and The National Gallery of Victoria (2013). In 2010 Philip was awarded fellowships by the Australia Council for the Arts, and the Australian Antarctic Division to document the effects of extreme climate and weather events on the human condition at Davis Station in Eastern Antarctica, and Macquarie Island. Outcomes from this fieldwork have been presented in the National Archives of Australia and Australasian Antarctic Expedition Centenary Exhibition (2011); Polar South: Art in Antarctica, Muntref Museum, the National University of Tres de Febrero, Buenos Aires (2011); and the 11th International Symposium on Antarctic Earth Sciences, Edinburgh (2011). In 2010 Philip began a three-year study of indigenous settlements in The Kimberley region of Western Australia through TURA's remote regional residency program in order to document the social and environmental conditions effecting remote communities. Outcomes from his work in the Kimberley have been presented at the Totally Huge New Music Festival, State Theatre Festival, Perth (2011) and the IASKA Spaced Biennial, Fremantle Art Centre (2012). Philip lectures in Sound in the School of Art - RMIT University, where he teaches Sound Cultures, and Spatial and Sonic Environments within the fine art degree. Philip researches in the areas of sound art, acoustic ecology and spatial sound practices, and is a chief investigator on two Australia Research Council funded

projects, Designing Sound for Health and Wellbeing (2008/10), and Spatial Dialogues: Public Art and Climate Change (2011/13).



ドミニク・レッドファーン Dominic Redfern

ドミニク・レッドファーンはメルボルン在住で、現場、画面とアイデンティティの交点でビデオアートを作製し、画像を通した経験の複雑さの中で表現を展開している。こういった興味はビデオの技術と文化に対する自意識的な観点から発せられており、ビデオを媒体と表現対象の双方に扱われている。

近年になり、彼のアイデンティティに関する取り組みは「場所」を取り巻く「物語」と場所の物語り由来の自然史言説 に焦点が絞られるようになった。環境を描写する過程の中で芸術や「自然」という文化的な構築物という観念の「美」の持つ定格、流通性、そして可能性が彼の作品の多重焦点となっている。

1998 年以来、海外やオーストラリアで作品を発表し続けている。パース国際芸術祭、プリズベン近代美術館（オーストラリア）、チュラロンコン・アートセンター（バンコク）、テートモデム（英国）、ハンバーガー・バーンホフ（ベルリン）、オルタナティブスペース・ループ（ソウル）、トーキョーワンダーサイト（東京）など。2012 年にエクスペリメンタ・ビエンナーレ、メルボルン国際芸術祭、リアルダンス（シドニー）、イアン・ポッター博物館で「Anatomy Lesson」展に参加した。現在、RMIT 大学美術学部メディア・アート学科准教授で、ビデオアートを担当している。

Dominic Redfern is a Melbourne based video artist who creates video works at the intersection of site, screen and identity, which give critical expression to the complexity of screen-mediated experience. These interests are expressed with a self-conscious approach to the technology and

culture of video, making it both subject and medium for his work.

In recent years his work with identity has increasingly focused on narratives of place and subsequently upon the dis-course of natural history. In the process of depicting environments, the status, currency, and possibility of beauty in art as well as the idea of the 'natural' as a cultural construction have become foci for his work.

His work has been exhibited at home and internationally since 1998 at venues including the Perth International Arts Festival, Perth institute of Contemporary Art, the Chulalongkorn Art Centre in Bangkok, Tate Modern, the Gallery of Modern Art in Brisbane, Hamburger Bahnhof, Alternative Space LOOP in Seoul, and Tokyo Wonder Site.



サイモン・ペリー Simon Perry

サイモン・ペリーは広く認識のある彫刻家でブリ・ド・ローム賞やロイヤルアカデミーから彫刻部門の金メダルを受賞する等、顕著な賞を獲得している。過去 20 年間の彼の制作活動は市街における公共アートのデザインと制作を焦点に、"Public Address" (2005) Federation Square; "The John Mockridge Fountain" (2000) , Melbourne City Square; "Threaded Field" (2000) , Docklands Stadium や "Public Purse" (1994) といった知名度の高い作品の制作に携わってきた。これらのプ作品の制作は多人数のアーティストチームや企業、多分野のデザインチームとの協働活動により実現された。又、彼は、革新的な多国籍展覧会、HEAT: Art and Climate Change 展に参加する等、芸術とエコロジーに関心を向けている。

数々の主要な国際団体や国立の公共アートの諮問委員やメルボルン市政府の新しい環境的に持続可能なビル、CH2 建設の過程でコンサルタ

ントとして務める等、公共アートの制作や関連法令に関する知識と経験は顕著に評価されている。又、ペリーは、公共芸術の依頼に関する方策の政府顧問の他、香港市公共芸術コンペティションや西オーストラリア州政府国際彫刻コンペティション等、国内外の主要な公共芸術や彫刻コンペティションの選定委員としても活躍をしている。更に、ペリーは RMIT 大学講師として、同学の学生とロンドン芸術大学生間の国際的協働制作という新しい教育モデルを共同で導入した。The International Virtual Studio Project, 2005-2007 はライブウェブ技術を駆使して異なる場所でインスタレーションを並行制作している生徒間の創作的なコミュニケーションを図るプロジェクトである。

Simon Perry is a highly awarded and publicly recognized sculptor and was awarded the prestigious Prix de Rome and the Royal Academy Gold Medal for Sculpture. Over the last 20 years the focus of his art practice has been the design and production of urban public art, and he is associated with significant and high-profile works in Australia, including: Public Address (2005), Federation Square; The John Mockridge Fountain (2000), Melbourne City Square; Threaded Field (2000), Docklands Stadium; and Public Purse (1994) Bourke Street Mall Melbourne. These projects have involved working collaboratively with large teams of artists, industry partners and multidisciplinary design teams. His more recent interest in the emerging field of art and ecology is demonstrated by his participation in a pioneering international exhibition HEAT: Art and Climate Change.

Perry is recognized for his experience and knowledge of public art practice and legislation. He has been selected to sit on number of public art advisory boards for major international and national organizations, and was a consultant for the new environmentally sustainable Melbourne City Council building, CH2. He has been an advisor to government on commissioning strategies for public art, and has also been selected to judge major public art and sculpture competitions in Australia and internationally, including the City of Hong Kong Public Art Competition and Government of Western Australia

International Sculpture Competition. As a lecturer, Perry co-created a new educational model for international collaboration for art students at RMIT University and Chelsea University of the Arts (London). The International Virtual Studio Project, 2005-2007 used live web-technologies to develop creative communication exchanges between students working on parallel installations in different physical locations.



クリステン・シャープ Kristen Sharp

クリステン・シャープは RMIT 大学美術学部美術史・美術理論学科のコーディネーターです。 2007 年以来、彼女は現代アートと都市空間、国境を越えたアートプロジェクトにおける共同ブラクティス、および現代アジア美術を研究している。シャープ女史は現在、オーストラリア研究協議会のプロジェクト（2010 年～2013 年）に関わっており、メルボルン、上海、東京に於ける「スペーシャル・ダイアログ ～ 空間の対話：公共アートと気候変動」に取り組んでいる。 2012 年には、クリステンは武蔵野美術大学の国際客員研究員として日本に滞在した。現在、美術と都市計画に関する書籍「Reimagining the City: art, globalization and urban space」(Intellect Books, UK, 2013 年) の共同編集に携わっている。2013 年に、彼女は「Liquid Architecture」フェスティバルの一環として、「The Sonic City」という国際シンポジウムのキュレーションを行っている。オーストラリアや海外でグローバル研究やアジア研究、文化研究の主要な学会にて研究発表をしており、又、現代アートとグローバル都市空間についての革新的な学際研究シンポジウムの共同企画にも携わっている。

Kristen Sharp is the Coordinator of Art History and Theory in the School of Art at RMIT University, Melbourne, Australia. Since 2007, she has been researching contemporary art and urban space, col-

laborative practices in transnational art projects, and contemporary Asian art. She is currently working on an Australian Research Council Linkage Project (2010-13), Spatial Dialogues: Public Art and Climate Change, located in Melbourne, Shanghai and Tokyo. In 2012, Kristen was an International Visiting Researcher at Musashino Art University, Tokyo. Currently, she is co-editing a book on art and urbanism, Re-imagining the City: art, globalization and urban space (Intellect Books, UK, forthcoming 2013). In 2013, she will co-curateThe Sonic City for Liquid Architecture Sound Art Festival. In addition to her publications, Kristen has co-convened a number of innovative inter-disciplinary research symposiums on contemporary art and global urban space.



小高沙里 Kodaka Sari

東京都在住
1990 年 石川県金沢市に生まれる
2009 年 武蔵野美術大学映像学科入学
2013 年 武蔵野美術大学映像学科卒業

「記憶」「静謐」「不安」「エロス／タナトス」「記号」「自然」：この6つのキーワードを核としながら、ジャンルは横断的に制作している。宣材写真、ライブなどの記録映像も撮影している。

- 2012.10. [グループ展]『Sounds of Weather』金王八幡宮
- 2012.6. [グループ展]『てんのきてん』SPACE/ANNEX
- 2011.11. [グループ展]『学生メディア・アート展』町田市立国際版画美術館
- 2011.9. [公募展]『北陸の映像祭 むびぐみ11』金沢アートグミ
- 2011.5. [グループ展]『おくつろぎください』Quantum gallery & studio
- 2010.12. [グループ展]『写真合体派宣言』Count Down Gallery 桃園画廊

- 1990 Born in Kanazawa city, Ishikawa Prefecture, Japan.
- 2009 Entered Department of Imaging Arts and Sciences (IAS) at Musashino Art University (MAU).
- 2013 Graduated from MAU-IAS.

I make cross-genre works based on six keywords that are the core of my works: “Memory”, “Peace”, “Fear”, “Eros/Thanatos”, “Sign”, “Nature”. I also create portraits, still photographs and documentary films.

- 2012.10. [group exhibition] “Sounds of Weather” at Konnô Hachimangû Shrine, Shibuya
- 2012.6. [group exhibition] “Tennokiten” at SPACE/ANNEX
- 2011.11. [group exhibition] “Student Media Art Exhibition” at Machida City Museum of Graphic Arts
- 2011.9. [public exhibition] “Hokuriku Film Festival Mubigumi 11” at Kanazawa Art Gumi
- 2011.5. [group exhibition] “Okutsurogi-kudasai” at Quantum gallery & Studio
- 2010.12. [group exhibition] “Shashin Gattai-ha Sengen” at Count Down Gallery Momozono Gallery



小牧菜奈 Komaki Kanna

- 1990 年生まれ
- 2009 年 京都市立銅駝美術工芸高校卒業
- 2011 年 IAMAS（岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー）DSP コース卒業
- 2013 年 武蔵野美術大学映像学科卒業

- 2012.11. Sounds of Weather/ 金王八幡宮(渋谷)
- 2012.8. GINZA映像祭/Pepper's Gallery(銀座)
- 2012.6. てんのきてん /SPACE ANNEX Gallery（日本橋）
- 2011.7. ユートピアンナイト / 飯田橋「文明」

2011.3. Translocating/ ソンウォンアートセンター（韓国、ソウル）
2011.2. IAMAS 2011 卒業制作展 / ソフトピアジャパン
2009.11. IAMAS イキマス DSP の変 / Apple Store Ginza
2009.2. 第 23 回毎日・DAS 高校生デザイン賞入賞・入選作品展 / サントリーミュージアム [天保山]

Born in 1990
2009 Graduated from Kyoto City Dôda Senior High School of Arts
2011 Graduated from IAMAS DSP Course (International Academy of Media Arts and Sciences, Gifu Prefecture)
2013 Graduated from Musashino Art University, Department of Imaging Arts and Sciences.

Produces graphic art, movies, sound, text, performance and more.

2012.11 “Sounds of Weather” exhibition at Konnô Hachimangû Shrine (Shibuya, Tokyo)
2012.8 “Pepper’s Gallery Festival” (Ginza, Tokyo)
2012.6 “Tennokiten” exhibition at SPACE ANNEX Gallery (Nihonbashi, Tokyo)
2011.7 “Utopian Night” at Bunmei (Iidabashi, Tokyo)
2011.3 “Translocating” at Songwon Art Center (Seoul, Korea)
2011.2. IAMAS Graduation Exhibition at Gifu Softopia
2009.11 IAMAS DSP “Ikimasu” at Apple Store Ginza (Tokyo)
2009.2. 23rd Suntory Museum Exhibition Design Award-winning daily high school・DAS [Tempozan]



宮本一行
Miyamoto Kazuyuki

メディアアーティスト／現代音楽家
2010 年武蔵野大学卒業。2012 年武蔵野美術大学大学院修了。

東京デザイナーズウィーク（12 年 10 年 08 年）、神戸ビエンナーレ（09 年）、DesCours（09 年 ニューオーリンズ）など多数の芸術祭に出展。その作品は、DSA 空間デザイン優秀賞（12 年）、アジアデザインアワード空間部門銅賞（09 年）、その他デザイン賞多数入選。また千葉県吹奏楽個人コンクール金賞およびトロンボーン部門 1 位（05 年）、全日本吹奏楽コンクール銀賞（06 年）など受賞。

現在では「環境の現象を新しい視点から観察すること」を研究テーマとして、様々な作品を制作している。またデザインチーム「MU＋a」の主宰、武蔵野大学 EP3 プロジェクトリーダーとしても活動中。

Media Artist & Musician
Graduated (B.A.) from Musashino University in 2010, and from Musashino Art University Graduate School (M.A.) in 2012.

Miyamoto’s works have been exhibited at Tokyo Designers Week (2012, 2010, 2008), Kobe Biennale (2009), DesCours (2009, New Orleans) and other art festivals. His work has received many prizes in design festivals, including the DSA Design Award Prize for Excellence in 2012, and the Bronze Prize in Spatial Category of HKDA Asia Design Award 2009. Miyamoto won Chiba Wind Music Individual Contest Gold Prize and The Trombone Section First Prize (2005), All-Japan Wind Music Contest Silver Prize (2006).

For Miyamoto’s research he is now focusing on observing environmental phenomena from a new point of view, and works as the director of the design team “MU+A” and EP3 project at MUSASHINO UNIVERSITY.



清水裕美
Shimizu Yumi

1990 年生まれ
2009 年 武蔵野美術大学映像学科入学
2013 年 武蔵野美術大学映像学科卒業
2012.6. て ん の き て ん /SPACE ANNEX Gallery（日本橋）
2012.11. Sounds of Weather/ 金王八幡宮(渋谷)

女性 6 人組の清純派ヒップホップアイドルユニット「リリカルスクール」のメンバー。

Born in 1990
2009 entered the Department of Imaging Arts and Sciences at MAU.
2012.6 “Tennokiten” exhibition, SPACE ANNEX Gallery (Tokyo)
2012.11 “Sounds of weather” exhibition, Konno Hachimangû, Tokyo.

Member of the hip-hop group “Lyrical School”.



武本拓也
Takemoto Takuya

演出家 / 役者 / ダンスパフォーマー
1990 年、群馬県生。2009 年、武蔵野美術大学映像学科入学。入学と同時にダンスと演劇を始める。
2009 年、劇団無敵旗揚げ公演「清瀬」にて初舞台（ダンサー）。2010 年、「ニューニュー」にて、「二人は冷たい瓶の中」で作・演出デビュー。2011 年、映像学科進級制作展にて演劇作品「パンク！そして荒野を駆け抜ける」を発表。2012 年 1 月、悪魔のしるし「SAKURmA NO SONOhirushi」出演。4 月、パフォーマンユニット「中立地帯」を結成。武本は主宰・

企画・演出などを担当する。6 月、パフォーマン
ス「対話の可能性 _ #おともだち」構成・演出。8 月、日暮里 d- 倉庫にて、長編作品「サマータイム」構成・演出。11 月、パフォーマン
ス「対話の可能性#おねがいごと」構成・演出（国際交流プロジェクト「Sounds of Weather」@ 金王八幡宮、渋谷）。2013 年、武蔵野美術大学卒業制作展、また代々木 ANCE にて、演劇「cage」（構成・演出）。他、小作品 / 出演多数。

Dance Performer / Actor / Producer.
Takemoto was born in 1990 in Gunma Prefecture. In 2009, he entered the Department of Imaging Arts and Sciences (IAS) of Musashino Art University (MAU), Tokyo, and started to act and dance. In 2009, he made his debut as a dancer in the performance “Clean” by theater group “Muteki Hata-age”. In 2010, he directed his debut work: “The two of them in a cold bottle”, and in 2011 the theater work “Punk RideThrough theWilderness” at the IAS department third year exhibition. In April 2012, Takemoto formed “Chûritsu Chitai” (“Neutral Zone”) performance unit, where he is responsible for planning and direction. In August, he organized and directed “Summertime” at Tokyo Nippori “d-Sôko” theater, and in November the performance “The possibility of dialogue - Wish” at the “Sounds of Weather” exhibition at Konnô Hachimangû Shrine, Shibuya. In 2013, he directed his theater piece “Cage” for three actors at the Musashino Art University Graduation Show and at Yoyogi Dance Theater.



八尋南実
Yahiro Minami

埼玉県在住
1998 年 千葉に生まれる
2008 年 武蔵野美術大学映像学科入学
2012 年 同大学卒業、武蔵野美術大学院入学

「詩と映像のあいだにうまれる興奮」をテーマ

に映像や GIF 画像などを制作しています。

展示・賞歴
2008 年 壮 年 前 期 展（グループ）/ 人 形 町 Vision’s
2009 年 ぶたてん（グループ）/ 武蔵野美術大学
2010 年 大家族展（グループ）/ 中野桃園画廊
2011 年 武蔵野美術大学映像学科 3 年進級制作展
My Japan CM Award 審査員賞
2012 年 武蔵野美術大学卒業制作展
Tell us something about TOKYO（グループ）/ 代官山 M
Fumi Labo’s Exhibition（グループ）/ 代官山 M
Sound of Weather（グループ）/ 金王八幡宮

1989, born in Chiba Japan.
2008 Enrolled in the Department of Imaging Arts and Sciences (IAS) of Musashino Art University (MAU).

I make video movies and GIF images on the theme of excitement that rises between the relationship of poetry and visual images.

Exhibition and Awards:
2008 “Prime of Life” (group exhibition) at Ningyocho “Vision’s” (Tokyo)
2009 “BUTATEN” (group exhibition) at MAU
2010 “Big Family” (group exhibition) at Momozono Gallery (Tokyo)
2011 “MAU IAS 3rd-grade Exhibition” (group exhibition) at MAU
“My Japan CM” Award Jury Prize
2012 “MAU IAS Graduation Exhibition” at MAU
“Tell us something about TOKYO” (group exhibition) at Daikanyama M (Tokyo)
“Fumi Lab’s Exhibition” (group exhibition) at Daikanyama M (Tokyo)
“Sounds of Weather”(group exhibition) at Konnô Hachimangû Shrine (Tokyo).



鶴飼佑子
Tsurukai Yûko

1988 年、東京都生まれ。
東京・千住にて生まれ育つ。
2012 年、武蔵野美術大学映像学科卒業。
現在、Web デザイナー。

私がいま生きているということを作品づくりをする中で、答えを見つけていけばいいと思い、父の私の成長をとらえたホームビデオと新たに父の生まれ故郷に訪ね追加撮りをしたビデオテープを再構成した作品を発表した。
卒業制作では、お金と愛について考え、お百度参りをするパフォーマンスのノーカット映像を撮り、一万円に模した私の思いを綴った手紙を配布。
Sounds of Weather プロジェクトでは、オーストラリアがもつ水不足の問題や水道水がごくごく飲めることなど全部含めて、カラダの中に水が踊っているような感じをビデオにした。なにもわからないまま、わからない生活を続けて行く中で、これ！と言えない何かをたくさん
の手段を使って、これ！って言えるようになりたいなと日々思いながら、生活をしている。

Born in 1988 and raised in Tokyo.
Graduated from Musashino Art University, Department of Imaging Arts and Sciences in 2012.
“Sounds of Weather”, SuperDeluxe, Tokyo 2011 and Project Space, Melbourne 2012.

Using old videotapes from my childhood, I made a work in 2011 on the theme of identity, depicting my father and me. For my graduation work I chose the theme of love and money, “Ohyakudo-mairi” (praying a hundred times), to create an uncut video performance work involving distributing letters in form of imitation 10,000 yen bills to express my thoughts.
Now that I have graduated, I will continue to develop my work. While not knowing anything, I’m living a life which I don’t understand, I’m living everyday and thinking that I do not have many means to commu-

nicate about “This!” and at the same time I think how important it is to be able to say “This!”.



宇治田枝理
Ujita Eri

視覚と聴覚の関係に興味を持ち、空間性を重視した音の研究を行う。
1987 年 神奈川県出身
2007.4 武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科入学
2011.1 [卒業制作]『Sound Study/Sound 8118』武蔵野美術大学
2011.4 武蔵野美術大学大学院造形科視覚伝達デザインコース入学
2011.11『Sounds of Weather』SuperDeluxe 東京
2012.2『Sounds of Weather』West Space + RMIT Project Space
2012.3 NHK-BS の「クラシック倶楽部／ザ・ジョンケージ」内でバリエーションズ6を演奏

I am interested in the relation between sound and sight. I am studying the spatial-ity of sound.
1987 Born in Kanagawa, Japan.
2007 Entered Department of Visual Communication Design at MAU.
2011.1 “Sound Study/Sound 8118” at MAU Graduation Exhibition
2011.4 Entered Graduate School of Visual Communication Design at MAU.
2011.11 “Sounds of Weather” event at SuperDeluxe, Tokyo
2012.3~4 “Sounds of Weather” exhibition at RMIT Project Space, Melbourne
2012.3 Performance of "Variations" (NHK-BS "The John Cage")



島崎隆輔
Shimazaki Ryūsuke

1987 年生まれ。東京在住。
2012 武蔵野美術大学造形学部映像学科卒
2012 N.N.N. Ring Ring Prize 受賞
2012 NHK-BS の「クラシック倶楽部／ザ・ジョンケージ」内でバリエーションズ6を演奏
2012 武蔵野美術大学図書館にてSPレコード収蔵業務に携わる。

楽曲制作、時々ダンサー。

1987 Born in Tokyo, Japan.
2009 entered the Department of Imaging Arts and Sciences at MAU.
2012 NNN Ring Ring Prize.
2012 Performance of “Variations” (NHK-BS “The John Cage”)
2012 Graduated from the Department of Imaging Arts and Sciences, Musashino Art University
From 2012 works at Musashino Art University Library.

Composes music and sometimes dances.



Σ!CH!KO (加藤道子)
Katō Michiko

1991 年大阪府生まれ。
15 歳の頃から本格的に写真を撮り始め、写真のコンテストで入選、入賞を重ねる。
近年は「フォトエンターティナー」と称して、写真に留まらずメディアアート、インスタレーション、パフォーマンスなど多岐にわたる制作活動を行う。
賞歴：2008、日韓交流組み写真フォトコンテ

スト最優秀賞。NIKON フォトコンテスト優秀賞 + 佳作、第 30 回よみうり写真大賞 高校生部門自由の部 / 佳作。
2009、JAMCA PRIZE フォトコンテスト 審査員特別賞。
2011、コダックフォトコンテスト マイベスト部門 / 銀賞。神戸ビエンナーレ 2011 フォトコンテスト 一般部門 / プロポーザル入選。PX3 国際写真コンクール (パリ)。
活動経歴：2010.11、「meat-met-met」展『初夜』中野桃園画廊。
2011.11、Σ!CH!KO『virginal』国分寺 PーN。
2012.09、syncs 主催 @落合 SOUP にて DUB-Russell × Σ!CH!KO。
2013.07 Σ!CH!KO 個展「ターヘルアナミア」Gallery Hinoki。

Born in Osaka in 1991, she started photography when she was 15 years old, and won several prizes in photo contests. She entered the Dept. of Imaging Arts and Sciences at MAU in 2010. Σ!CH!KO is active as a "Photo Entertainer", beyond art, installation, and performance.

AWARDS: 2008, Japan and Korea Exchange Photo Contest Grand Prize. NIKON Photo Contest Prize of Excellence. 30th Yomiuri Photo Grand Prix, Tokyo. 2009, Doshisha Women's College of Liberal Arts SEITO Photo Contest Grand Prize, Kyoto. JAMCA PRIZE Photo Contest Special Jury Award. Tokyo. 2011, 32nd Kodak Photo Contest Winners Exhibition. Kobe Biennale Photo Contest. PX3 International Photo Competition, Paris.

EXHIBITIONS: 2010.11, "meat-met-met" @Nakano Momozono Gallery, Tokyo. 2011.11, Σ!CH!KO "virginal" @ Kokubunji P-MAN, Tokyo. 2012.09 "syncs sponsored" @ Ochiai SOUP with DUB-Russell, Tokyo. 2013.07, Σ!CH!KO solo exhibition "Tafel Anatomie", Gallery HINOKI, Tokyo. http://michikonbu.tumblr.com

Special Guests



Haco

作曲家、ヴォーカリスト、エレクトロニクス奏者、サウンドアーティスト。神戸のスタジオ・メスカリーナを拠点にプロデューサー、エンジニアとしても活動中。ソロや複数の主宰プロジェクトでの CD 制作、コラボレーション、国際フェスティバル出演など数え切れない。ポストパンク、電子音響、アヴァンギャルド、即興、ポストロック、環境、テクノロジーを背景に、鋭い感性で活動範囲を広げている。長年にわたって歌姫とも称される。近年、サウンドアートの文脈でライブ・インスタレーション、レクチャー、ワークショップも精力的におこなっている。2005 年には作品「Stereo Bugscope 00」がオーストリアのアルス・エレクトロニカで入賞。またコンテンポラリー・ダンスの音楽製作、サウンドデザインも多く手がけている。

Composer, vocalist, electroacoustic performer, sound artist, founding member of After Dinner (1981-1991) and Hoahio. Haco has created numerous recordings both as producer and sound designer. As a musician, she has given performances throughout Japan and the world. With her unique sensibility, Haco has developed a practice based on principles of post-punk, electroacoustics, the avant-garde, improvisation, post-rock, environmental sound, and technology. In 2005, her CD "Stereo Bugscope 00" was awarded a prize in the digital music category at Prix Ars Electronica in Austria.

http://www.hacohaco.net/
http://www.japanimprov.com/haco/hacoj/



Satō Minoru -m/s

佐藤実 -m/s, SASW。自然記述と美術表現の関係に関心を持ち、物理現象と多様な概念によるインスタレーション、パフォーマンス、出版、執筆などの制作活動を行っている。またソロや ASUNA との共作、バンド IL GRANDE SILENZIO、「f u r」など幾つかの音楽活動や、学芸員として展覧会、アートイベントの企画を行っている。1994 年 -2006 年レーベル WrK を運営。

Satō Minoru (-m/s, SASW) is interested in the relationships between the description of nature and art representation, and he is creating art works per physical phenomena and various concepts. He has several music projects - solo, collaboration with ASUNA, “IL GRANDE SILENZIO”, “f u r” and so on, and as a curator he is organizing contemporary art exhibitions and various events.

http://www.ms-wrk.com
http://www.myspace.com/minoruSatō



リジー・ボグソン
Lizzie Pogson

リジー・ボグソンはフィールドレコーディングによる作品を制作している。サウンドスケープと合成音という異なった材料を組み合わせ、記録された空間は、その逆の合成音を含めるための自然環境として機能する。古典的なバイオリン奏者としての訓練を受けた。作品の多くは、あからさまな音楽である。数多くの著名なオーストラリアと国際的なアーティストと並んでパフォーマンスやインスタレーションに参加している。彼女は、メルボルン国際芸術祭では、ウエスト・スペースギャラリー（メルボルン）であり、PICA（パース）で実施し、彼女の組成物出品している。 11 分の 2010 年に彼女の作品は、メルボルン、パリの両方でグループ展「磁気トレース」で紹介。

Lizzie Pogson's practice involves the collection and abstraction of field record-

ings. By juxtaposing natural and synthetic sound material in different combinations recorded natural spaces act as environments for the inclusion of synthetic sounds and vice versa. Having trained as a classical violinist, many of Lizzie's works are overtly musical. Lizzie has participated in numerous performances and installations alongside prominent Australian and international artists. She has exhibited and performed her compositions in the Melbourne International Arts Festival, at West Space Gallery (Melbourne), and at PICA (Perth). In 2010/11, her work featured in the group show 'Magnetic Traces' in both Melbourne and Paris.



JOU

JOU（じょう）、本名：松本薫（旧姓・城之尾）。コンテンポラリーダンス作家・武蔵野美術大学非常勤講師。1966 年東京生まれ、千葉県育ち。海外・東京生活を経て、2012 年より父の出身地、肝付町踊る地域おこし協力隊員として、地域活性アート活動を国内外で展開中。コンテンポラリーダンス作家、舞踊家、振付家。誰もが可能性を持つ「自分のダンス」を基軸に、人と場をつなげる創造活動を国内外で展開。昨年 2012 年に東京から鹿児島県に拠点を移し、「アートで『ただいまおかえり』の関係を作ろう」をコンセプトに「セカンドホームタウン・プロジェクト」を立ち上げた。県内広域芸術祭「おおすみ-かごしま芸術祭」、大隅半島肝付町のアーティスト・イン・レジデンス「踊る地域案内所」、滞在型アートプロジェクト「きやんせ」などを仕掛ける傍ら、海外でのコラボレーション創作にも関わっている。

JOU is a contemporary dance artist, and director of [Odorjou]. “When your body has been changed, your world as a whole is going to change”. She started her dance life at 23 years old, and through life in U.S.A and Malaysia, created many projects and dance which always show a new way to connect

Special Guests

between different people, culture, place, and fields, by her dance world. In 2012, she moved to Kagoshima from Tokyo, and challenging to create new relationships between arts and communities through arts events. She won the "Special Prize for Foreign Choreographer" at the 2008 Seoul International Choreography Festival. She is the artistic director of Kagoshima "DAAIC" - the Dancing Area and Arts Centre, and director of the Osumi-Kagoshima Arts Festival. <http://2ndhometown.net/okaf2013>
Lecturer at MAU, Dept. of Imaging Arts and Sciences. <http://odorujou.net>



角田俊也
Tsunoda Toshiya

1964年に神奈川県生まれの角田俊也は、東京藝術大学美術学部美術研究科大学院を修了し、現在は横浜を拠点に活動している。環境音をモチーフとした制作で知られるサウンドクリエーターとして、また同時にインスタレーションの制作、パフォーマンスを行うアーティストとして多岐に渡る活動が知られている。彼の音響作品は、小型マイクやコンタクト・マイクを用いて注意深くフィールド・レコーディングされた音波によって構成され、特定の振動現象は時間と空間の主観的な経験に輪郭を与えることを示している。とりわけ海外からの評価が高く、美術館、ギャラリーの展覧会への出品、各国のレーベルからのCDリリースなどを行っている。主な展覧会に「Soundings A Contemporary Score」(MoMA, ニューヨーク、2013年、ルーク・ファウラーと共作)、「Simple Interactions Sound Art from Japan」(2011年、ロスキル現代美術館、デンマーク)、サーペンタイン・ギャラリー(2009年、ロンドン、ルーク・ファウラーと共作)、横浜トリエンナーレ 2008 (2008年、ルーク・ファウラーと共作)、「ハーフライフ」(2007年、屋外彫刻展アーガイル、スコットランド)などがあり、インヴァーレイス・ハウス(エジンバラ)、スタック・アートセンター(ベルギー)などでパフォーマンスを行っている。

Yokohama based artist and composer Tsunoda Toshiya has been prolific in the experimental arts community for over two decades. He has produced innovative works of field recording and collage for 15 years, carefully concentrating the lyrical power of the world we inhabit. Born in 1964 in Kanagawa, Japan, he studied oil painting at the Tokyo National University of Fine Arts and Music, where he received an MFA. In 1994, he co-founded and ran label WrK alongside m/s, releasing sound art pieces from various young Japanese sound artists, including his own. He currently runs labels "Skiti" and "edition.t". Tsunoda's recorded works often take the form of untainted field recordings - his "Extract from Field Recording Archive" series documents vibrations through solid objects and air, and his CD "Ridge of Undulation" features minimally processed recorded landscapes and vibrations, with sparse sine waves. Tsunoda has released collaborations with Murayama Seijiro, Sugimoto Taku, Yoshimaru Mitsuhiro and Michael Pisaro, among many others.



工藤文輝
Kudô Taketeru

1967年東京生まれ。慶大仏文科卒。在学中より演劇、ダンス、日舞を学ぶが、1989年、舞踏との出会いが以後の進路を決定付ける。玉野黄市、和栗由紀夫作品に出演ののち、1992年よりソロ活動を開始。1995～1998年山海塾に参加。1997年には自らの集団「東京戯園館」を設立。さまざまな分野のアーティスト、カンパニーと関わりつつ、ソロをメインに世界各所で持続的に公演を行っている。

Kudô Taketeru was born in Tokyo in 1967 and graduated from Keiō-Gijuku University with a degree in literature. He opened his eyes towards butō when he first watched Tamano Kōichi's show in 1989, following which he joined the com-

panies of Tamano Kōichi and Waguri Yukio and worked with internationally-acclaimed butō troupe Sankai Juku from 1995 to 1998. Kudô danced and choreographed at Asbestos-kan under the direction of Motofuji Akiko (the widow of butō's co-creator Hijikata Tatsumi) and formed his own company Tokyo Gienkan in 1997. In recent years, he has focused on performing mostly solo work throughout the world.

<http://www.kudo-taketeru.com/>